

---

# 厄神様はかく過ごせり

ガラスの靴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

厄神様はかく過ごせり

### 【Nコード】

N1230D

### 【作者名】

ガラスの靴

### 【あらすじ】

神を信じない高校生のもとに現れたのは神様修行中の幽霊。そんな人々の日常をのんびりと見ていく連作短編です。連載小説「厄神様はかく語りき」を読むと11倍くらいわかりやすくなると思います。

## 厄神様はかく過ごせり（前書き）

都合上連載小説へと変更させていただきました。

短編の方を読んで頂いた皆様、まことに申し訳ありません。内容は変わりません。

また、連載小説「厄神様はかく語りき」を読んでいないとさっぱりだと思えます。

そんなものに興味はない、という方は他の小説を探しにいたただくか或いは勇敢にもこのままお進み下さい。

## 厄神様はかく過ごせり

皆さん、おはようございます。小夜です。

直樹さんには厄病神と不名誉な呼び方で呼ばれ続けていますが、ちゃんと名前があるんですよ？

本当はわたし自身の1日をお伝えしなければならんですが、わたしは一部の人しか会話ができない上にほとんど直樹さんと同じ生活リズムをしていますので、今回は代わりに直樹さんの1日をレポートしていきたいと思います。

「直樹さん、朝ですよ」

「……………」

直樹さんは今大きな家で一人暮らしをしています。両親の方は共に海外出張らしく、ほとんど戻ってこられないそうです。

そのため直樹さんは目覚まし時計で起きることに慣れてしまったようで、わたしが起こそうとしてもまったく起きてくれません。

以前に目覚ましを止めてから起こしたときは結局遅刻してしまい、怒られてしまいました。

それから保険として目覚まし時計のアラームをつけたままで起こしているのですが、そうすると余計目覚まし時計が鳴るまで起きてもらえなくなってしまうました。

ジリリリリリリ！！

「……ん、朝か。……厄病神、着がえる。出てけ」

「……………」

………今日も失敗してしまいました。いつか目覚まし時計が鳴る前に起こせるよう頑張ります。

………それにしても、あの言い方はちょっとひどいと思います……………。

朝食は直樹さんと一緒に作ります。

確かに最初に作ったときは少し失敗してしまいましたが、今では目玉焼きだつてきちんと焼けます。それなのにトーストを焼くこととお皿に盛り付けることしか許してくれません。

わたしはご飯を食べることができないので、作るのは直樹さんの分だけです。

直樹さんはだいぶ小食で、トーストと目玉焼き、それにサラダを少し食べるだけでお腹一杯のようです。

それでも朝からしっかりと食べるから健康だ、と本人は言っています。

その後は、直樹さんの通う高校へ行きます。

直樹さんの家からは歩いて20分ほどの距離で、遅刻しない限りは随分のんびりと歩いていきます。

「よう狭山！ 今日はずいぶん早いな！」

「最初からいたかのような登場の仕方をするな。遅刻寸前の癖に」  
直樹さんのご友人の桜乃さんが登校してきました。直樹さんとは対照的にいつも遅刻の境界線にいるようです。

「はい、藤阪さん、遅刻ですね」

「分かっているわよ煩いわね！！ 少しは目に見なさいよ！！」

そして今日も朝礼が始まってから教室に現れたのは藤阪さん。本当に遅刻の回数が多いです。

わたしはこのお2人には姿が見えません。そのためわたしと直樹さんが話しているところを見られると直樹さんが変人に見られてしまいますので、できるだけ話しかけないようにしています。やっぱり直樹さんに迷惑はかけないようにしたいです。

「狭山、それではな」

「ああ。お前も部活頑張れよ」

授業が終わり、クラスの人たちがそれぞれ家路についたり部活に行ったりします。凜さんは剣道部に所属していて、とてもお強いようです。

「凜さん、頑張って下さいね！」

「ああ、ありがとう」

そして凜さんはわたしを見ることが出来る数少ない人たちの一人なのです。そのために少し危ない目にも遭ってしまいましたが、直樹さんを心配しての行動だったようで、とてもいい人でした。

そして直樹さんは吹奏楽部へと向かいます。

「辻————！！ お前は何度言えば————！！？」

「きゃ————！！ みんな逃げる————！！」

直樹さんは今日も辻さんの悪戯に怒って追いかけてくをしています。実は直樹さん自身楽しんでるのかもしれませんが、本当に迷惑なことにはしっかりと拒絶の意思を表す人ですから。

「狭山くん！ 貴方は本当に最高学年の自覚があるの！？」

「う……………松崎……………」

そうしていつものように部長さんに怒られていました。非常にばつが悪そうな顔をしています。やっぱり本人も楽しんでいたのでしよう。

「……………何を笑っている」

……………睨まれてしまいました。どうやら気付かないうちに顔が笑っていたようです。

「やあやあ直樹氏！ 今日も遊びに来たよ！」  
「帰れ」

「……では失礼します」

「なんでお前が反応するんだ！ 帰れといわれて本当に帰る部員がどこにいる！？」

そして神楽さんと舞さんとも楽しくお話をしています。神楽さんはわたしと同じように幽霊から神様になった人で、今ではとても偉い人のようです。まったく知りませんでした。

そして神楽さんが神様になる時に幸せを分けてもらっていたのが舞さんだそうです。

このお2人も凜さんと同じくわたしの存在に気付いてもらえる人で、わたしも神楽さんには色々なことを教えてもらっています。

……できるだけわがままを言えいいそうなのですが、あまり直樹さんに迷惑をかけることはできないので難しそうです。

「……お前が来てから急に毎日疲れるようになったな」

「直樹さんは皆さんにとっても好かれていたみたいですね」

「気持ちの悪いことを言うな」

直樹さんは否定したいようですが、皆さんと話しているときのお顔はとても楽しそうです。幸せを分けていただくのが勿体無いくらいです。

ドン！

チャリチャリーーン！！！！

「……………」

……ところが、どうやら直樹さんがわたしのことを「厄病神」と呼ぶのも仕方のないことだと思ってしまっただけで直樹さんには不運が降り注ぐようです。スーパで夜ご飯の買い物済ませようとしていた時、他の人にぶつかって財布の中身を床にちりばめてしまいました。

「直樹さん、大丈夫ですか？」

「……厄病神、たまには仕事を休んだらどうだ？」

ひどいです。わたしは直樹さんに進んで厄介事を呼び込んだりはしません。時々はやっちゃうこともあります。それでもいつもは願ってもいないのに直樹さんが困るようなことが起きてしまうのです。

「おい、俺は寝るぞ」

夜ご飯を食べ終え、お風呂に入った直樹さんは高校生にしては済めの寝巻き姿でわたしに報告をしにきました。

「はい。おやすみなさい」

「寝るなら電気は消せよ」

直樹さんはそう言うと言つて寝室へ入っていきました。

わたしはこれからお風呂に入ります。

直樹さんは自分のことを幸せとは遠いものだと思っているみたいですが、全然そんな事はありません。

自分の周りにある幸せに気付くことはとても難しいことですが、きつとだれでも出来ることだと思います。

直樹さんが少しでも早くそのことに気が付きますように。

わたしの一日はこうして過ぎていくのでした。



## 厄神様はかく過ごせり（後書き）

というわけでリニューアルオープンです。

……あの、本当にすいません。見捨てないで下さい。

これは「かく語りき」の主人公以外の登場人物がどのような日常を送っているのかという補完的な小説となっております。

こちらは毎週更新で行きます。遅いですが。遅いですね。今回は気分屋様のお話になる予定です。

気分屋様はかく過ごせり（前書き）

頑張つて週2でいくことにしました。

すぐに挫折するかもしれません。

今回は藤阪のお話です。

気分屋様はかく過ごせり

『ぴぴぴぴぴぴぴー!』

「んん……?」

朝7時を少し過ぎた時間。枕元に置いてあるあたしの携帯電話から着信アラームが鳴り響く。

「煩いわね……」

布団に入ったまま携帯を手繰り寄せ、確認する。メールだった。

『朝だぞ。遅刻するなよ』

差出人は、あいつ。あたしでも何だかよく分からない内に結ばれた約束だけど、何のかんのいって結局毎日送ってくれている。

「……眠い」

しかし所詮は電波で送られてくる単なるディスプレイ。あたしの睡魔はあっさりとそれを撃退し、二度寝を決めこんだ。

「……いー……さよー」

コンコン。

部屋のドアをノックする音が聞こえる。

あたしはイサヨなんて名前じゃない。きっと他の誰かだろう。

「……葵ー、朝よー」

……やっぱりあたしのことらしい。それならそうと早く言って欲しかった。

「……って!」

ガバッ!

ベッドから跳ね起きる。先程放り投げた携帯を引っ付かんで時刻を確認。

8時17分。

「……なんでもっと早く起こしてくれないのよー!?!」

「だって葵、何度呼んでも起きないんだもの」  
「起こす努力をしなさああい!!」

あたしの学校は8時30分から朝のHRが始まる。といっても教師どもが教室に来るのは大体その2〜3分後だ。そしてあたしの家から学校までは走って10分。支度を最速で済ませるのに5分くらいかかるので、なんとか間に合う時間なのだ。

だが。

「はい、藤阪さん、遅刻です」

「なんであんたはこんな時間からいるのよ!? 他の連中見習って予鈴鳴ってから教員室出なさいよね!？」

「他の方はベテランですから。私は新参者なのでこうでもしないと追い付けないんですよ」

何を言うか。20年前から教壇の上に立っていたのは知ってるんだぞ。

「お前、俺がメール送っても結局遅刻ばかりじゃないか」

「煩いわね! 二度寝しちゃったんだからしょうがないじゃない!」  
「威張るな」

「いやー、朝から元気だねえー」

ふらりと現れたのは響。どういう意味よ。

「いやいや、いいんじゃないの? こういうのも」

「どういう意味だ」

「別に意味なんてなくてもいいだろ」

「いや、よくないからな」

あたしの目の前で楽しそうに馬鹿な話をする2人。こうしていると随分前から知り合いだったみたいだけど、実は響はあたしとの付き合いの方が長い。あたしとは小学校から一緒。直樹とは高校になって初めて出会っている。

「おい藤阪、聞いてるのか?」

「聞いてるわよ馬鹿」

「……酷くね？」

何やら響があたしに話しかけていたみたいだけど無視。どうせろくなことではない。

「やっぱりカツ井は最高だよな！」

あたしたち3人の昼休みは基本的に学食だ。響は毎日飽きずにカツ井しか頼まない。体に悪いわよ。

「放つとけ。どうせ蛋白質以外の栄養素は摂取したところで活用されないだろ」

それもそうね。

「お前ら、何かひどくねえ？」

「気のせいだ」

「気のせいよ」

「……泣いていいですか？」

放課後。部活の時間だ。

「藤阪、部活だぞ」

直樹が呼びに来る。来るのだけど、体が動かない。だから勝手に言ってきた。

「……殴るぞ」

わかったわよ。行けばいいんですよ。

「……貴方たちも、いい加減にして欲しいわね」

部活に来てしよっぱなから不愉快な顔に出会ってしまった。

「いつもいつも煩いわね。10分くらい遅れたからって何か重大な損失でもあるわけ？ 株取引じゃあるまいし」

「そうね。その10分貴女たちがいないのを後輩が見てどう感じるかも分からない人には難し過ぎたかしら」

「あー……あれだ、確かに遅れたことは遅れたが、その分今からの練習で取り戻すんだ。な？」

直樹がかなり苦しい取り繕いをする。

「ふう……いい加減、最高学年としての自覚を持って欲しいわね」  
馬鹿馬鹿しいとは思えない捨て台詞を残して静流は自分の練習に戻っていった。

「ほんとに腹が立つわねあの女」

昔からそうなのだ。幼稚園時代に仲良く遊んでいた自分を殴りに行きたい。腐れ縁にも程がある。

「まあ、松崎も悪気があつて言ってるわけじゃないだろ」

こいつは人の悪口に乗るということを知らない。誰の悪口が出てもそれをフォローするのだ。

そこが良いところでもあるのだけれど、こういうときには苛々する。

「……あんた、随分静流に甘くない？」

「……そうか？ そうでもないだろ」

最初の沈黙はなんなんだ。

「ですよー。センパイは部長相手には全くもってヘタレです」

「……辻。その甚だ不名誉な台詞を俺の鉄拳が飛ぶ前に修正しろ」

横からひよっこり満月が顔を出す。話が分かるわね。

「そうですね。部長だけじゃなくて同じクラスの碧海さんなんかにも優しく接してますねー」

「……あんた、それだけ聞くとかなり最悪な性格に見えるわね」

「煩い。不愉快な誤解に過ぎん」

……でも確かに静流にはともかく碧海には優しい気がする。中学からの付き合いらしいし……。

「私には乱暴ですよねー。ひょっとして好きな子はいじめたくなるタイプですか？」

「なんだ？ それは宣戦布告と見なしていいのか？」

……だがむしろ一番危険なのはこの後輩かもしれない。勘だが。

「やあやあ直樹氏！ 今日も女性に囲まれて幸せそうだね！」

「……プレイボーイですか」

「これが幸せそうに見えるなら今すぐ眼科に行け。人を不名誉な言葉で形容するな。帰れと言いたいのが市原は部員だからギリギリ堪えて神楽、お前は今すぐ立ち去れ」

「はっはっは！ 直樹氏は好きな子には意地悪をするタイプなんだろうー？ 僕ならいつでも大歓迎だよ！？」

「殺すぞ」

……そっち方面ってことは……ないわよね？ ……たぶん。

「お姉ちゃん」

「すみれ、帰るわよ」

「はい」

部活が終わって家に帰る。妹のすみれも一緒だ。よせと言ったのに同じ高校に来て同じ部活に入ったのが1年前。それから部活のある日は一緒に帰るようになった。

「ただいまー！」

「ただいま」

上がすみれ、下が私だ。私はそんな気持ち悪いテンションで挨拶したりはしない。

「お帰りなさい」

「お帰り」

リビングには母さんと父さんがいる。当たり前前の光景だけど、家

に帰っても誰もいない人だっているのだ。それを思うと邪険にすることなんて出来ない。

「葵、狭山君とはどうなの？」

「何い！？ やややつぱりこの前夕飯に呼んだのはそういうことだったのかああ！？」

「お姉ちゃんねー、今日も狭山先輩と一緒に部活来てたよー」

「煩い！！ 食事は黙って食べなさい！！」

……いやまあ、時にはあるけれども。

「お休みなさい」

「はい、お休みなさい」

「お休み」

11時過ぎ。お風呂に入って寝ることにする。ちなみにすみれは9頃には眠ってしまう。お子様め。

あたしの一日はこうして過ぎていく。普通の高校生もきつとこんなもんだろう。

そう、非日常なんてありえないのだ。今日も世界は平和である。



## 気分屋様はかく過ごせり（後書き）

ということで気分屋様のお話でした。

妹は藤崎すみれ。高2で辻さんと友達です。

もう一人高2でこの2人とトリオを組んでいる人がいるのですが、そのうち出てくるでしょう。

一応彼女は自分の気持ちになんとかなく気付いております。

気付いた上で今の関係を望んでいる、といったところでしょうか。次回は聴衆役のお話になると思います。

**聴衆役はかく過ごせり（前書き）**

今回は聴衆役のお話です。  
要するに桜乃のお話です。

## 聴衆役はかく過ごせり

オッス、オラ響！

今日は俺のヴェールに覆われた私生活をほんの少しだけ見せてやるぜ！

朝になると、綺麗な姉さんが優しく俺を起こしに

「起きろつつつてんだよクソガキがあー！！」

「ぎゃああああああー！！」

来るといいな、ほんと。

「うう……脇腹が痛い……」

「軟弱な野郎だな。軽く蹴っただけじゃねえか」

嘘つけ。殺気こもってただろ。

この若くしてドメスティックバイオレンスの親玉みたいなのは俺の姉貴、桜乃琴音さくらのことねという。何が琴音だ、名前の響きと性格のギャップが詐欺レベルに達している癖に。

「フゴア！？」

「デメエ、今ム力つく考えしてただろ」

「なんで考えただけで踵落とし喰らわなくちゃいけないんだよ！！」

「あーあーごちゃごちゃうるせーなー」

「真面目に聞けよオイー！！」

「無駄だったの」

「あん？」

横で黙々と朝食をとっていた拓斗たくとが達観とも諦めともとれる溜息をついた。

「ん？ 何が無駄だった？ 言ってみ？」

姉貴が拓斗の両頬を引っ張りながら尋ねる。おーおー、伸びる伸びる。

「ひゃひゃひゃ、ひえゝひゃんひひょんひゃひよひつひえひよひゅひゃつひゅゝひよゝゝ！」

そこまで言い切ったのは立派だが弟よ、何を言っているのかわからんぞ。

「日本語話せ」

「あひやあああゝ！！！」

案の定姉貴は引つ張っていた頬をそのまま両サイドに伸ばしきつた。指で掴めなくなつて頬は解放されるのだが、その瞬間の激痛は経験者にしか分からない。

「さて、クソガキ2人のメシも終わつたし、千歌<sup>ちか</sup>を起こしにいくか」

「まて姉貴」

「ああん？」

「まだレンジで温めた冷凍ご飯と梅干ししか出てないんだけど」

「それで全部だ。千歌ー！ 朝だぞー！」

行つちまいやがつたあのクソ姉貴。白飯と梅干しなんて健康的にも程があるだろ。

「兄さん、だから姉さんにそんなこといつたつて無駄だつーの」  
諦めるなマイブラザー！。この不平等社会を覆せるのはお前の手にかかつているんだぞ。

「拓斗お兄ちゃん、響お兄ちゃん、おはよー！」

ああ、おはよう。

俺の家族は他の家と比べてもこの少子化の時代にしては子供が多いらしい。上から姉貴、オレ、拓斗、そして千歌だ。

「今日も可愛いなあ千歌は。頼むからそのままのお前でいてくれよ」

「……？ はーい！」

拓斗、妹を愛するのは結構だが本音が後半にだだ漏れしてるぞ。

「……それは誰を想定して言つてんだ？」

「げえ！？ ね、姉さん！！」

「さあ千歌、今朝ごはんを用意するからな。しっかり食べるんだぞ？」

そう言いながら炊飯器から炊きたてのご飯をよそい、目玉焼き、焼き鮭、味噌汁を千歌の前に並べる。……もはや何も言つまい。

「……拓斗お兄ちゃんと響お兄ちゃんはいいのー？」

「ああ、あいつらはもう食べ終わっただ。食いしん坊だからな」

「そうなんだー！」

言うに事欠いてこの女は。

「おはよーう」

やがてお袋が現れる。

「おう、おはよ」

「おはようお母さん！ー！」

「……」

ツカツカツカ。

バツコーン！！

「「あだー！ 何すんだよ！？」」

「朝の挨拶も出来ない奴に文句言われたくないわね」

それを言うならいきなりスリッパで息子2人を殴りつける奴に正論言われたくないわ。

「おっと、もうこんな時間。コラー！ー！！ アンタ寝坊なんかで遅刻したら二度と寝れないように軒下に吊すわよー！ー！！」

「ヒイヒイヒイ！！」

寝室から悲鳴。

……まあ、なんだ。要するにアレがオレの両親だ。この女尊男卑のコミュニティを作り出した元凶とも言える。どちらも音大をトップレベルで卒業したとは思えない。

オレと拓斗はこの不平等社会を打破すべく日夜努力しているのだが、お袋と姉貴という最初にして最大の関門を未だ突破できず、結果消極的改善としてせめて千歌を今の性格のまま育て上げようという五カ年計画に走っている。分かってくれ。

「ところでデメエら、学校はいいのか？」

「え」

時計を見る。

…… 8時20分。

「……しまったああああ!!」

「おい拓斗!! お前オレの代わりに3・DのHR出る!!」

「はあ!? なんでだよ!？」

「なんでってお前、代返してもらったために決まってるだろ!!」

「ふざけんな! 僕が遅刻になるだろ!」

互いに全力疾走しながら怒鳴り合う。取り敢えず学校に着けばあとは寝てればいいので体力配分は問題ない。

「ヤバイよ兄さん! あと3分!!」

「うおおおおお!!」

「ま、間に合った……」

「お前、馬鹿だな」

「馬鹿ね」

ギリギリ教室に滑り込み、机で息を整えていると狭山と葵の呆れたような声が耳に届いた。お前らもあの家で生活してみる。

「おーい、朝だぞ」

「……はっ」

顔を上げると狭山の顔が目の前に。

「もう昼休みなんだけど」

「お前、学校に何しに来てんの?」

「煩い。寝にきてんだ。悪いか。」

「悪いわね」

と藤阪。お前だって授業中は寝てんじゃない。

「休み時間は起きてるわよ。あんたみたいに無駄に過ごしてるわけじゃないの」

「いや、お前ら、根本的に間違ってるからさ」  
分かってるわこの優等生。

「ん？ なんだ？」

学食に行こうとすると狭山が何かに反応したように足を止めた。

「あん？ なに？」

「あ、いや……」

視線の先には……碧海の姿。馬鹿。

「……………」

ああああ見る。藤阪が目に見えて不機嫌に。さつさと気付けこの鈍感男。

「悪い、ちよつと先行っててくれ」

あの超絶馬鹿はあろうことが碧海の元へ駆け出しやがった。

「……そうね。先に行きましょう」

あの、葵さん、すんげえ怖いんだけど。

「何のことかしら？」

笑顔で迫るな。トラウマものだぞ。

狭山は碧海に何かを渡そうとしているようだ。碧海が拒否しようとするもそのまま押し付ける。お、帰ってきた。

「お帰り。どうだった」

藤阪、藤阪、まだ怒りのオーラ出てるから。

「あ、ああ。財布を忘れたみたいだったから、昼食くらいちゃんと食えって金を……………」

「ふーん……………」

「…………ど、どうしたんだよ…………？」

「別に」

「……………」

絶対こいつは藤阪の不機嫌の理由に気付いてない。これに気付いているならとつくにくつついてる。

「んめえー！ー！！」

食べるのはもちろんカツ丼。やはりこのカツ丼は美味い。

「こんなもんばっかでよく体もつな……」

「ほら、あれよ、脳味噌筋肉？」

「オレのカツ丼を馬鹿にするなあー！」

授業が終わり、部活の時間。

「桜乃、お前も来るのか？」

「おうし、じっくり聴いてやろう」

「だとよ、藤阪。行くぞ」

「嫌」

「おい」

「辻ちゃん上手くなったねえー。もう狭山超えてるんじゃない？」

「いやいや、センパイはこんなもんじゃないですよ」

「あいつももう少し自信持って吹けばいいのに、勿体無いよなあー」

「私は今のセンパイの音の方が好きですよー。なんだか優しい感じがして」

「そういうもんかねえ……？」

「はい。そういうもんなんです」

辻ちゃんは今日も元気だ。狭山のいる前では絶対こんなこと言わないんだよな。狙ってやってるのか？

「桜乃くん、部活は遊びにくるところではないんだけど」

今日も鬼部長のお出ましだ。姑コンテストなんてものがあつたら最年少で殿堂入りを果たしそうだ。部活は遊びに来るところだろう。「兄さんも部活に入ればいいのに」



拓斗がティンパニを調律しながらばやく。馬鹿、こういうのは外から見た方が面白いんだよ。

「さあ直樹氏！ 僕のために思う存分演奏してくれたまえ！」

「気持ち悪いわ！」

「神楽さん、もう少しです。頑張ってください」

「たきつけんなー!!」

帰る途中で神楽を見かけた。今日も意味のわからないことを言っているようだ。そういえばあの従者みたいな女の子はこの前正式に部活に入ったらしい。

他の奴らより一足先に客席へ。これでいい。主役は狭山に譲るさ。精々面白い劇を見せてくれ。

「ただいまー」

「何こんな半端な時間に帰ってきてやがんだ俺様と千歌のティータイムを返せクソガキイイー!!」

「ンギヤアアアアアアアー!!」

オレの日常はこうして過ぎていく。

……泣いていいか？

## 聴衆役はかく過ごせり（後書き）

というわけで聴衆役の一日でした。

毎日更新でないと全くアクセス数が伸びない所にこの作品のポテンシャルの低さを感じますね。

桜乃は実はかなり書きにくいキャラクターです。馬鹿の中に隠れた聡明さ、とでも言うのでしょうか、それを表現するにはまだまだ力不足なようです。

彼の兄弟姉妹は本編でもその内出てくると思います。ちなみに弟の拓斗は辻やすみれと同じ学年です。

次回は恐らく退魔士様のお話です。

退魔士様はかく過ごせり（前書き）

日常ほのぼの、第4弾です。

でも今回あんまりほのぼのしてません。

お気をつけ下さい。

## 退魔士様はかく過ごせり

私の一日は早くから始まる。

まず早朝。太陽が昇らない内に起き、日課の鍛錬を済ませる。この時に行うのは素振りなどの基礎的なものが中心となる。

「643……644……」

このようなものは無心で行うのが大事だ。ただただ決められた通りに体を動かす。

それを2時間程続けると朝食に丁度良い頃合いだ。母上が作ってくれた料理はいつも美味しい。

「凜、学校はどうだ？」

「普段通りです。小夜も特に周りの人間に影響を与えている様子はありません」

「そうか……」

「凜、狭山くんとはうまくいってる？」

「ぶっ!？」

吹いた。しまった、汚い。

「な、な、何を言っているのですか母上!？ わた私は別にそのようなことは……!？」

「なんだとお!？ 凜、まままさかお前あの小僧と付き合っているのか!？」

「ち、父上! 変なことを言わないで下さい!」

「み、認めん! 認めんぞ! あんな軟弱な小僧……」

「あなた、凜が選ぶ人なら大丈夫ですよ。力だけが全てではありません」

「し、しかしもしもの時にしっかり守る事が出来る漢でなければ……」

……

「あなた？」

「う、うむ……」

「ち、父上も母上も、余計な事を言わないで下さい。別に私と狭山はそのような関係ではありません」

「あらあら、照れちゃって」

「むむむ……」

「だ、だから!!」

はあ。朝から疲れた。

朝食を食べ終えた後は学校へ向かう。

学校までは若干遠いがせいぜい20分程度だ。歩いていけばすぐに着く。

教室の中は今日も同級生がそれぞれの会話を楽しんでいる。といつてもわざわざ話しかけて来る者もないので私にとっては静かな朝だ。

ガラッ。

「ふう。最近はや通りの時間に来れるようになってきたな」

「そうですね。あまり変なことも起こらなくなりましたし」

始業ベルが鳴るより15分程早く狭山が登校してきた。小夜も毎日ついてきている。

「……………」

無意識に狭山を目で追ってしまふ。すると小夜が気付いて手を振ってくれた。

「……ふふ……」

いい子だ、と思う。

私と話をする人は本当に少ない。そんな中で休み時間などにちょくちょく話しに来てくれるのは性格の表れだろう。

と、小夜が狭山を呼び止めてこちらを指差した。ちょっと待て。  
「ん？ どうした碧海？ 何か用か？」

「い、いや！ なんでもない！」

「そうか。……ところで碧海、3限の英語の予習してきたか？ ちよつと分からなかった所があるんだが、分かるか？」

「あ、ああ。ここは……」

狭山は普段から性格が悪い、振りをしている。

善人は嫌いなのだそうだが、本人は誰よりも面倒見がよいのに気付いていないのだろうか。私なんかと話をしてくれる人など狭山以外にはいないというのに。

「……誤解……してしまうぞ……」

「だぁー！ 危ねええええー！」

「し……死ぬかと思つたわ……」

我がクラスの遅刻魔ふたりも今日は間に合つたようだ。桜乃はいかにも遅刻しそうな雰囲気を漂わせているにも関わらず実はあまりしていないのだが。

「だからな、アレに意味がないならやめるぞ」

「気合いが足りないのよ！ もつと起こす気で送りなさい！」

「なんだなんだ？ なんの相談だ？」

「お前には関係ない」

「消えなさい」

「……ひどくない？」

彼女らと狭山は高校に入ってから付き合いのはずだ。それにもかかわらずあんなにも気心の知れあつた仲になっているのはその社交性故だろう。

……私とは正反対だな。

「はい、HRを始めますよ。おや、今日は全員揃っていますね」

「こつちみるな」

やがて担任の先生が教室に現れ、いつもと変わらぬ一日が始まつた。

「狭山」

「ん？ どうしたんだ？」

昼休み。私は以前借りた金を返しにきた。

「この前の金だ。助かった、ありがとう」

「……忘れてた」

お前が忘れてどうするのだ。貸した金が返ってこないかもしれないぞ。

「……不覚だ」

「狭山さん、お体の調子でも悪いんですか？ 顔が赤いですよ？」

「煩い。黙れ。碧海、次からは気をつける」

気をつけなければならぬのはどっちだ。性格に合わない身の振り方をするからこうなるんだ。

まあ、性格通りに振る舞って私のようになるよりいいのかもしれないが。

「それでは、今日はここまで」

「起立、礼」

「「ありがとうございますー」」

6時間目まで授業が終わり、放課後となる。剣道部に行くために教室を出る。

「碧海、今日は部活か」

「ああ」

「そうか。頑張れよ」

「……っ！」

「頑張ってくださいね！」

「……あ、ああ……」

どうかしている。

これでは日常生活もままならないではないか。  
どうかしている。

「……無様だ……」

胴着に着替えたまではないが、忘れ物をしてしまった。忘れ物を取ってくると部員に告げた時の恥ずかしさは言葉では表現できない。

ガラッ！！

「おりよ」

「桜乃か」

教室のドアを開けると先客がいた。恐らく吹奏楽部を少し覗いてこれから帰るのだろう。

「碧海か。胴着姿なんて珍しいな」

「……そうか」

「ま、あれだろ。忘れ物でもしたんだろ」

「む……」

言葉に詰まる。

「あら？ 凶星？ 碧海なんかでも忘れ物するんだな」  
だからなんだというのだ。

「まあまあ。いいじゃないの。ボケた所の1つや2つないと面白みにかけるっしょ」

別に面白さを求めてるわけではない。

「はいはい。ここにいたのが狭山じゃなくて残念でした」

「なっ……な、何を言っているのだ！？ 私はそのようなことは…

…！」

「いや、もういいっす……。んじやな。とっと忘れ物見つけた方がいいんじゃないの？」

そうだった、私は忘れ物を取りに来たんだった。

忘れ物を回収し部活に戻る。

今日の練習は余り手応えはなかった。



「只今帰りました」

「お帰りなさい。ご飯できてるわよ」

夕飯を食べて後は、夜の稽古。父上が直々に稽古をつけてくれる。

「……はあっ！」

「動きにムラがある。まだ感情を制御しきれていないな」

「……はいっ！」

「感情を完全に制御出来れば笑いさえも力に変えることができる。覚えておけ」

「はい！」

そこまで出来たら人間業ではないだろう、とも思ったが言わないでよく。

……そもそも父上が笑うこと事態殆どないのだし。

「お休みなさい」

「はい、お休みなさい」

「うむ」

私は8時頃に床につく。

以前それを狭山に話したら大層驚かれたが、狭山も就寝時間を藤阪や桜乃に驚かれていたので、おそらく寝る時間というのは聞いた時に驚かなければならないのだろう。私もきちんと驚けるようにしておかねば。

こうして何もない日が過ぎていく。

この時間は、きっと大切に過ごさなければならない時間なのだろう。

そんな気がする。

退魔士様はかく過ごせり（後書き）

というわけで退魔士様の日でした。

全然ほのぼのしてないのは気のせいです。

やってられないのも気のせいです。

最近あとがきが適当なのも気のせいです。

作者が風邪を引いているのも気のせいなのでしょう。

というわけで次回は後輩様の日をお送りする予定です。  
ありがとうございました。

後輩様はかく過ごせり（前書き）

長らくお待ちいたしました。

やっとこさ更新です。

え？ 待ってない？

というわけで後輩様の日常をどうぞ。

## 後輩様はかく過ごせり

皆さんこんにちはー！

我らがアイドル、辻満月です！

今日は私の日常をほんのちよっぴりだけ教えちゃいましょう！

朝は意外と早いです。お弁当を作らなければいけませんから。

「うーむ……ブロッコリーかアスパラか……」

詰める物を迷う時って結構楽しくないですか？

「おはよう」

「おはようございまーす」

お父さんが起きてきました。ちなみにお母さんはいません。私が小さい頃に死んでしまったそうです。

「お父さん、ブロッコリーとアスパラどっちがいい？」

「うーん……お父さんはアスパラかな」

はい決定。アスパラを炒め始める。

「それじゃ、お弁当は冷蔵庫に入ってるから」

「ありがとうね。行つてらっしゃい」

「いつてきまーす！」

お弁当を作り終えたら、学校の支度を済ませて出掛けます。

ガタンゴトン。

この音は私の足音なんかではありません。そう、実は私は電車通学なのです。

おかげで毎日若くして人生に疲れたかのような顔をしているサラ

リーマンやO.Lの人たちに影響されてしまいそうです。どうしよう。

駅から学校までは歩いてほしい10分くらいです。もうちょっと近くてもいいのですが。

ガララッ！

学校について教室に入ります。まだ生徒はほとんどいません。Hの30分前ですから当然ですけどね。

このヒマな時間をどうするかというと勉強に使います。授業を真面目に聞かなくても済むようにです。予習しておけば分からないところだけ聞いて終わりですから。

「おはよー」

ゲルマン民族大移動の軌跡を眺めていると横からのんびりした挨拶が聞こえてきました。

「おはよう、すみれ」

「満月ちゃんえらいよねー。ちゃんと予習してるもん」

ならすみれもやりなさい。それに目的を考えると多分偉くはない。「分からないところがあつただけど、お姉ちゃんに訊いても教えてくれないの。満月ちゃん教えてくれる？」

そう言って英語の教科書を出される。まあ藤阪センパイに文系科目を訊くのは間違っている。どうせ訊くならセンパイにしろ。

「ここは倒置が起こってるから……」

「あ、そっかー！　ありがとー」

いえいえ、お礼は学食のデザートでいいですよ。

「え、え……」

ガラッ！

「よし、セーフか……」

HRまであと3分を切った頃に馬鹿が来ました。

「あ、拓斗、今日体育あるけど着替えは？」

「そんな見えすいた嘘に引つ掛かるか。取りに帰らせて遅刻させる気だろ」

ちっ、前回は課題提出と言って帰らせたときに学習したか。

「拓斗くん、おはよう」

「お、おう、おはよう藤阪」

「チキン」

「何言い出すんだお前はああ！？」

煩いチキン。

「拓斗くん、どうしたの？」

「い、いや、なんでもない、なんでもないぞ！？」

明らかに狼狽してるじゃん。

「おい満月！ 余計なこと言うな！」

ガッ！！

「うん？ 余計なことってなにな？」

「ぎゃあああああ！！ 痛い痛い！！ 離せこのバイオレンス女！

！」

額を掴んだ手に力を込める。

「んがあああああ！？」

よし、制裁終了。

「た、拓斗くん、大丈夫……？」

なんかピクピク動いてるし平気でしょ。

「そ、それって痙攣じゃ……？」

「よし、HRを始めるぞー、席につけー」

すみれの弱々しい主張は担任教師の声に掻き消されました。

「おし、学食行くか」

「うんっ」

「すみれ、ちゃんとデザート買ってねー」

「う、うー……」

お昼になりました。私は自分のお弁当を持って2人の後に続きます。

「よし、ハヤシライスでいいか」

「わたしはA定食」

2人とも食券を持って列に並びます。それにしてもすごい人です。これだけいると知ってる人も……。

「なにぼけつとしてるんだ。邪魔だ邪魔」

「ちよつと考え事してただけですよー。センパイこそぼつつとしてと頭からお弁当かぶりますよ」

「ぐぬ……それは言うなとあれほど……」

私が列を見ているとセンパイがポンと現れました。思わぬ幸運です。

「いやあ、あの時はびっくりしましたねー。足をとられて転びそうになったと思ったら……」

「それ以上言ったら殺すぞ」

はいはい。わかりましたよ。

隠している必要はさらさらないのでキツパリと言いましよう。私はセンパイが好きです。無論恋してるってほうの好きです。

少女漫画のヒロインならもう恋をしたというだけでその相手と結ばれるのは決定事項なのですが、どうやら現実はそう甘くはないようです。センパイは意外ともてているようです。

まああの女装がとても似合いそうな中性的な顔立ちとか、本人は悪役ぶりたいたいのでしょうがその顔に似合わない性格の悪さとか、それにも関わらずそんじょそこの善人よりお人好しな本性とか、魅

力的な要素は山ほどあるので当然かもしれませんが。なんせ私が好きになったのですから。好みがおかしいとかそんな文句は受け付けません。

「直樹、なんかあんたの後輩がずっと私を見てるんだけど」

「気にするな。そいつの奇行は今に始まったことじゃない」

「ひどいですよー」

目下最大のライバルはこの人でしょう。下の2人ではありません、上の人です。私やセンパイを勝手にナルシストにしないでください。で、なんなのよ？ さっきからずっと見てたみたいけど」

「藤阪センパイって理系科目は学年トップですけど文系科目はからつきしなんですよね？」

「……何か悪い？」

「で、センパイは文系はそこそこいけて理系はちょっと苦手」

「だからなんだ。文句でもあるのか」

「じゃあ2人を足して2で割った人ならちょうどいいですよね！！」

「ぶふっ！！」

「あ、あんた何言ってるのよ！？ あんまり変なこと言っな！！」

「えー、変なことですか？ 私はそんな人がいたらってという話をしただけですけどー」

「そ、そうだけど……」

「阿呆なことばかり考えてるんじゃない！ 練習しろ練習！」

なんかもうこの反応見ただけでバレバレです。しかもセンパイも若干反応が見られるあたり要警戒ですね。

「あなたたち、また騒いで。後輩が見てるでしょ」  
と思ったら部長の登場です。

「これは満月の起こした騒ぎよ」



「またそうやって人の責任にして。少しは最高学年の意識を持ちなさい」

「あんたねえ……」

いやあ、今回はほんとに私が起こしたんですけどねえ。

「い、いや、確かに辻が馬鹿な話をしてからだだし、それに乗った俺達もどうかと思うしな！」

センパイが仲裁に入ります。なんか部長相手に強く出れない感じがしてますね。弱味でも握られているんでしょうか？

「……分かったわ。狭山くん、貴方がしっかり指導して頂戴」  
行ってしまいました。

「やあやあ直樹氏！ 今日も相変わらず静流君の言葉が耳に痛いね！」

「いるのが当然みたいな登場の仕方をするな」

部長が行ってしまったと思ったら今度は神楽センパイがやってきました。生徒会長つてヒマなんでしょうか？

「ああこんにちは！」

「お前は黙れ」

センパイが神楽センパイとお話していると時々意味不明な発言が飛び出します。なんなんでしょうか。

「というわけで、舞さん、あれはどういうことでしょう？」

最近入部した舞さんは神楽センパイのお知り合いらしいのできつとあの現象も説明してくれるでしょう。

「……心も体も繋がっているのでしょうか」

「……そ、そうですか……」

うーん、独特の観察眼を持った人ですね。

部活が終わると再び駅へ。

家へ帰る前にスーパーで買い物をして帰ります。

「ただいまー」

まだお父さんが帰ってくる時間帯ではありませんが、家に入る時には挨拶を。基本です。

「ただいまー」

お父さんが帰ってきました。

「おかえりなさいー」

私の生活はこんな感じです。

他にも色々なことがある時もありますが、それはまたの機会に。ではー。

## 後輩様はかく過ごせり（後書き）

という訳で作品で初めて主人公への好意を表明しました辻さんです。彼女も頭はいいのですよ。授業聞いてなくても学年で10位以内に入りますし。

次回は部長様のお話の予定です。

部長様はかく過ごせり（前書き）

遅くなりましたが6話目です。  
部長の話です。

## 部長様はかく過ごせり

朝。目を覚ます。

「おはようございます」

「おはよう」

「おはよう」

お父様とお母様のいる食卓につく。

「いただきます」

「……静流、まだ部活は続けているのか」

「ええ。引退すべき時が来るまでは続けさせていただきます」

「……今から勉強しても遅すぎるくらいなんだぞ。いいのか」

「私の人生は私が決めます。お父様は心配なさらないで下さい」

「……静流、大丈夫なの？」

「平気です。ご心配なく」

自分のことくらい自分で決める。それにわざわざ部活を続けていても大丈夫な大学の附属校に入ったのだ。進学できないなんて事は十中八九ありえない。

がらつ。

教室に入る。誰もこちらを見ない。

当然だ。教室という狭い空間の中でも自分の興味のない人間はもはや背景の一部に過ぎない。わざわざ道端にある石ころを気にする人間なんていない。

「やあおはよう静流君！ 今日朝から難しい顔をしているね！」

……それを進んで観察しようという変人も時にはいるけれど。

「神楽くん、用がないなら話しかけないでくれる？ 貴方も雑談を楽しめるほど暇な人間ではないはずだけれど」

「もちろん！ 私にかかれば雑談という貴重な時間を生徒会長など

という面倒な仕事で潰すことなどありえんよ！」

……思考回路が根本的に違う人間は対処に困る。思えば私の周り  
はそんな人間ばかりだ。

「最近部活はどうかね！？ 僕の見たところでは後輩の諸君もなかなか部活を楽しんでいるようだが！？」

「ええ、知っているわ。部員でもない人間とお喋りをしているわね。無駄だわ」

「ふむ、目的のない会話ほど人生の潤いとなる時間はないよ！！君も少しその辺りを試してみてはどうだい！？」

冗談を言わないで。そんな無駄なことをしている暇はないの。

「残念だよ！！ それでは失礼する！！」

神楽くんが立ち去ると同時に担任が入ってきた。

「ではH Rを始める」

「起立、礼」

毎日同じことの繰り返し。本当に時間が進んでいるのか疑わしくなる時さえある。

だが時間は進んでいる。もう戻れないところまで。

昼は教室でパンを食べる。普段ならそのままゆっくりと食べているところだが、今日は部長会議があるのでパンを持って空き教室へ向かう。

「では、秋の文化祭に向けた各団体の出展予定を来週月曜までにこちらへ提出して下さい」

とうとう文化祭に向けた準備が本格的になってきた。

私にとって最後の演奏会を開く場でもある。

文化祭は土日の2日間行われ、吹奏学部は2回演奏をしている。土日両日で演奏会を開いているのだ。

演奏会場はアリーナのため、招待試合を行うバスケットボール部などとスケジュールがかぶらないように注意する必要がある。

「このような時間帯にしようと思っっているのですが」

「……うん、いいんじゃないでしょうか？ バスケット部の顧問たちとも相談しておきます」

「ありがとうございます」

その日の内に暫定の予定を組み立て顧問に伝える。この手のものは早ければ早いほどいい。

そして放課後。

他の部員達が待たないようにすぐさま音楽室の鍵をもらって開ける。

「ちわーっす」

「こんにちは」

「おはようございますー」

「……ええ、おはよう」

下級生達が集まりだした。それぞれ自分の楽器を取り出して練習を始める。私も練習をすることにした。

「ほら、ここまで来たんだから観念しろ」

「まったく、もう少し粘れると思ったのに……」

練習を始めて10分程経ち、他の部員達もあらかたそろった頃にようやくあの2人がやってきた。

「貴方たち、毎回言ううようだけれど少し遅いわよ。少しは」

「最高学年の自覚を持ちなさい、でしょ？ まったく、毎回毎回ワンパターンね」

「……それを分かっているながら遅れるのね。反省の色がないのは何を反省すればいいのか理解できていないからかしら」

「反省する必要があるから反省しないのよ。まだ来てない部員だっているでしょ」

下級生に対して示しがつかないということを何度言っても分からないようだ。

「いや、まあ、確かにそうなんだが、せめてあと5分は早く来た方がいいな」

「……あんだねえ……」

「そうね。5分でもまだ遅いくらいだけれど」

「よし、それじゃあ気をつけるか。ほら藤阪、行くぞ」

「……もう……」

狭山くんは葵……藤坂さんと違って多少なりとも反省はしているようだ。そうでなくては困る。

「ぶちよー」

「あら、辻さん、なにかしら」

「舞さんが何やら伝えたいことがあるらしいので行ってあげて下さいー」

「……用があるなら自分で来ればいいと思うのだけれど……」

まあ辻さんがわざわざ私を呼びに来たのだからそうしなければならない事情でもあるのだろう。

市原さんは他の多くの部員とは違い狭山くんのように空き教室で練習している。一緒に練習する人はいないのかしら。少し心配になる。

「市原さん、どうしたのかしら？」

「部長、実は折り入ってご相談があるので……」

ひどく真剣な顔で切り出される。何の相談だろう。

「桜乃さんの弟さんの事はなんと呼べばいいのでしょうか」

「……え？」

「普段神楽さんと同じ学年で狭山さんのご友人の方をさして桜乃さんと呼びしているのですが、その桜乃さんの弟さんはなんと呼べばいいのでしょうか」

「……それを私に相談してどうしろというのだろう。」

「と、とりあえず、2人が同じ場所にいないときは桜乃さんでいい



のではないかしら？ 2人が一緒にいるときだけお兄さんや弟さんをつければいいと思うわ」

「そうですか。ありがとうございます。参考になりました」

……なんだったのだろう。

「やあやあ諸君！ 元気にやっているかね！？」

「邪魔するぞ」

「わざわざ断んなくても平気だって！ お、部長、遊びに来たぜ！ 部員でもない人間が3人まとめて来た。正直邪魔だ。

「用がないのなら帰って欲しいのだけれど」

「随分邪険に扱われたものだね！！ いいじゃないか、君達の素晴らしい演奏を堪能したいのだよ！！」

「それなら演奏会本番に来てくれないかしら」

「それでは面白くないだろう。本番にいたる努力の過程にこそ誇れるものがある」

「……ならせめて部員としてそこに参加して欲しいわね」

「当事者じゃ逆に見れないものもあるってことさ。なあ！？」

「そうだね！！」

「そうだな」

……頭が痛くなってきた。団結するところまで扱いづらい連中だったとは。

「……もういいわ。狭山くんならあつちで練習してるわよ」

「ありがとう！！ では僕達はそちらへ行こう！！ 後輩諸君、練習頑張ってくれたまえ！！」

はい。

「……神楽くんの言うことには随分気持ちよく従うのね」

「それはまあ生徒会長ですからー」

生徒会長であることと言つことを聞くことには何か関係があるのかしら。

「なんとなく聞いた方が自分のためにもなる気がしますかー?」

「そうね。辻さんは少し素直すぎるかもしれないけれど」

「やだなあー、私は全然素直じゃないですよー?」

「あら、意外ね」

「ふっふっふ、私の本性を見くびってますねー」

全くもって裏があるようには見えない。純真そのものだ。

「そのフレーズ、フルートはあまり主張しないようにしてくれ。2回目はホルンを聴かせたい」

「わかったわ。藤坂さん、ここからこの間は今よりも少し小さくしていいわ」

「はい、わかりました」

指揮者の時の狭山くんは普段とはまた違う凛々しさがある。普段からこの調子ならもう少し後輩にも尊敬されそうなのだが。

「いやーしかしあの狭山はなんかキモイなー」

「自分に惚れている、といったところか」

「はっはっは！ 水仙にならないよう気をつけねばなー!」

「……うるさいわ!! いらんこと言うなら帰れ!!」

……普段とのギャップのせいで全く尊敬の対象として見られていないのが残念だ。

「それじゃあ今日はこれで解散。気を付けて帰ってね」

はい。

こうして今日も一日が過ぎていく。

「ただいま帰りました」

「ああ、お帰り」

「お帰りなさい」

家に帰れば両親といくつか会話をしてあとは自室で勉強をする。

部活に真剣になるためには努力を怠ってはいけない。

こうして時は過ぎていく。

本当に進んでいるのか疑わしくなるほど変わらないまま。

だが気付けば戻れないところまで変わってしまうほどはつきりと。

## 部長様はかく過ごせり（後書き）

若干ピリピリしてますね。なんででしょう。

更新の時間が遅かったのはちょっとした事情があったからです。  
詳しくは本編をご覧ください。

とまあ本編の宣伝も済ませたところで次回は神様のお話です。

御神様はかく過ごせり（前書き）

どうもこんにちは。

かなり更新が遅れてしまいました。

とりあえずどうぞ。

## 御神様はかく過ごせり

やあやあ諸君、おはよう！ 元気かね！？

ちなみに僕は元気だ！ やはり朝から元気がいいと一日が素晴らしいものになるね！

「……神楽さん、どこに向かって話しているのですか？」

「はっはっは、気にすることはないさ舞君！ では行こうか！」

「おはようございます神楽さん、朝ごはんはもう出来ていますよ」

「いやはやいつも申し訳ない！ これは今月の食費です！」

舞君の母君、雪絵さんに食費の入った封筒を渡す。

「いえ、お金は構いません。私たちが勝手にやっていることですから」

「では僕の食事を豪華にするのにでも使ってください！」

「ふふふ、わかりました。ではありがたく使わせて頂きますね」

このやり取りは毎回やっている。お決まりの会話なのだ。

「やあ神楽くん、おはよう」

「ええ、おはようございます！ 今日も早いですね！」

「ああ。舞をよろしく頼むよ。では行ってくる」

「はい、頑張つて下さいね」

「行つてらっしゃい」

「行つてらっしゃい！！」

舞君の父君、豊氏を送り出したあとは3人で朝食をとる。この時間は中々いいものだ。豊氏も朝が早い仕事でなければ加わることが出来るのだが。

「さて、ごちそうさまでした！ それでは舞君、行こうか！」

「ごちそうさまでした。お母さん、行つてきます」

「はい、いつてらっしゃい。ふたりとも、気をつけてね？」

任せて下さい！ 舞君は僕がしっかりと護衛しましょう！！

「神楽さんの方が事故を起こしやすいんですから、気をつけてください」

「はっはっは、これはまた厳しいね！」

舞君の言う通りだ、気をつけるとしよう。

「ではこれで」

「そうだね！ また昼休みに会おう！」

学校について、それぞれの教室へ。僕は3年の教室、舞君は1年の教室へ。

「おはよう！ 諸君、元気かね！？」

「よお、神楽」

「今日も朝から元気ね」

クラスメイトが挨拶を返す。もっと元気が良くてもいいと思うのだがね。朝はみな低血圧らしい。

「夜寝るのが遅いからだと思うのだがどうだろう！？」

「……高校生にとっては普通の時間よ。貴方が寝るのが早すぎるだけ」

静流君もなかなか機嫌が良くないようだ。といっても一日中こんな調子だがね。

「おーし、HRを始めるぞー」

「起立、礼」

いやしかし、静流君の号令は生真面目だね。たまには英語で言うてみてはどうかと提案してみようか。

「さあ、では生徒会を始めよう！」

昼休み、生徒会が毎週2回開かれる。議題は様々だ。

「会長、最近生徒の中に素行の良くない者がいるようです」

ふむ、直樹氏に小夜君がいる以上そういうこともあるだろうが、やはり良いことではないかも知れないね。無関係の人間に迷惑をかけるのは関心しない。

「よし、彼らには僕が言っておこう！　なに、話せばわかってくれるさ！」

公約に掲げた文化祭の賞金は当選した週に実現成功した。あとはゆっくりとやるだけさ。

「それでは舞君、今日は僕も吹奏楽部に遊びに行こう！　オカルト研究同好会はまた次だ！」

放課後、待つていた舞君に告げる。

「わかりました。あまり来ていると松崎さんに怒られてしまいますよ」

なに、心配はない。それもまたいいものだ。

舞君が行った後、オカルト研究同好会の部室へ。ここには舞君も触ってはいけない怪しげな物がいくつかある。もっとも今日を休みにしたのは他の理由があるのだがね。

ピピピピピ……！

ほらきた。通信機が鳴っている。正直とりたくはないが、取らないと怒られてしまうのさ。

「やあ、僕だ！　何かな！？」

彼女のことです。

「わかっているとも！　いずれ話はするつもりさ！」

あなた様は自分の立場を……

ああわかったわかった。全く、簡単に上の立場になるものじゃないね。

「やあやあ直樹氏！　調子はどうだい！？」



「お前が来なければ最高だったな」

直樹氏の発言は真剣に捉えたら相当辛辣だ。僕はもう慣れたけどね。

「龍一、あんた新しく立ち上げた部があるんじゃないの？」

「それは今のところ僕と舞君だけしか部員がいないのだよ！　だから舞君がこちらに来るとなると暇でね！」

「暇人め……」

暇とは素晴らしいものではないかね。暇のない人生は水のない川のようなものだよ。

「あまり多くても周りに迷惑をかける点では似てるかもしれないわね……」

「神楽センパイ、そろそろ部長が来ますよー」

おお満月君、報告ご苦労。

「じゃあ松崎が来る前に帰れ」

それは寂しいね。是非最後まで舞台上で踊りたいものだ。

「……貴方、また来たの」

「よいではないか！　僕も君達の音楽が聴きたいのさ！」

「なら部員として来て欲しいわね」

相変わらずお堅いね。もう少し柔軟な態度をとれば人気も出ると思うよ。

「いやー、部長も頭堅いですよねー」

静流君が行ってしまってから満月君が言う。

「やはり神楽さんは歓迎されていないようですね。日頃の行いのせいでしょう」

「舞君、言葉とは時に凶器となるのだよ！　僕にももう少し優しい言葉が欲しいところだね！」

「神楽さんにはこのくらいが丁度かと」

それは悲しいな。僕とて感情くらいはあるのだよ？

「仲いいよな……」

「ふふっ、おふたりとも楽しそうです」

君達には敵うまい。小夜君が直樹氏のところへやって来たのも偶然ではないかもしれないね。

直樹氏、頑張ってくれたまえよ。

「何を見ているんだ、気持ち悪い」

「はっはっは！ 直樹氏のあまりの凜々しさに見惚れていたのさ！」

「うわ、本格的に気持ち悪いわね……」

「ロリコンでホモですかー、救いないですねー」

うん満月君？ 何かなロリコンというのは？

「それでは諸君、練習頑張ってくれたまえ！」

はい。

そろそろ静流君の目が本格的に怖くなってきたので退散するとしてよう。

「おや」

校門に向かって歩いていると、胴着姿の女子が剣道場から出てきた。

「やあ凜君！ 今日よりはりきっているようだね！」

「神楽か。吹奏楽部の帰りか？」

「そうだとも！ あそこはなかなか楽しいね！ 君もたまには遊びに行ってみてはどうだい！？」

「ば、馬鹿なことを言うな。私は吹奏楽部に何の関係もないし、行く理由もない」

関係とは作り出すものだよ。それに、直樹氏と親しいというのは理由にならないのかな？

「まあ、君がそう言うのなら無理に勧めはしないさ！ ではさらばだ！」

人とは素晴らしい。

笑い、泣き、怒り、喜び、どの瞬間を切り取っても違う世界を見せてくれる。

叶うならば、もう少しだけ、僕に夢を。  
幕が降りる、その瞬間まで。

## 御神様はかく過ごせり（後書き）

タイトルで2日間くらい悩みました。

なんというか、語呂がね……

それだけ悩んでこれかよ！ とか言わないで下さい。

ネーミングセンスの欠如は本編で充分自覚中です……

というわけで神様のお話でしたが、かなり難産でした。

この作品は勢いで書いているのでボツになること事態ほとんどないのですが、今回なんとテイク3でやっと形になりました。

こちらはほのぼのが売りなのでシリアスはお呼びでないのです。

次回は霊媒様のお話です。

………霊媒ってだけで人を指しますよね？

■ 霊媒様はかく過ごせり（前書き）

登場人物の日常を全部書ききつたら今度は過去話とか現実時間の季節モノでも書こうかと思えます。

では、そんな幻想にはまだまだ遠い今回の話をどうぞー。

## 霊媒様はかく過ごせり

「舞、朝ですよ」

「……はい」

おはようございます。市原舞です。

眠いです。

しかしいつまでも寝ている訳にはいきません。神楽さんを迎えに行かなければなりませんから。

「それじゃあ、神楽さんを迎えに行つてきます」

「はい。よろしくね」

制服に着替えると一旦家を出て、隣の部屋に行きます。

ガチャリ。

合鍵は神楽さんがここへ引越してきた時に貰いました。出入り自由です。

「神楽さん、朝ごはんです」

「あ……舞君……こんな夜中になんの用だね……？」

神様と言えど寝ぼけますし、神楽さんと言えど夢現ではテンションも低いのです。

「神楽さんを迎えに来ました」

「僕はまだ死なないさ……」

「では私の方から伺います」

布団を持ち上げて中に入ります。制服に皺がつきそうですが後で直すことにしましょう。

「うん……舞君……って、のわあああああ!？」

おはようございます。

「おおおはよう舞君! いやそうではなくて、僕の布団の中で何をするつもりだったのかね!？」

「十二を」

「だああああああつ!! それ以上言っではいかん!! さあ

行こうか!？」

残念です。私としてはいつでもいいのですが。

「神楽さん、おはようございます」

神楽さんにお母さんが声をかけます。

「お、おはようございます! 今日もいい天気ですね!」

「は、はあ……」

「お父さん、おはようございます」

私もお父さんに挨拶を。仕事へ行くのが早いお父さんはもう食べ始めています。

「おはよう舞。早く食べないと遅刻してしまうよ」

そうですね。神楽さん、早く食べましょう。

「あ、ああ! そうだね!」

朝ごはんを食べている間にお父さんが仕事に出かけ、その後私達も学校に出掛けます。

「では舞君! また会おう!」

学校につくと神楽さんと別れて自分の教室に向かいます。

「さあ、HRを始めましょう。欠席している人は 1人、か」

先生が教室に入ってきました。私がこの学校に来たときから空いている空席を見つめて溜息をつきます。

「まあいいわ。さ、クラス委員、始めて」

クラス委員の人が号令をかけ、学校の一日が始まりました。

「おや、舞君! 今日も来たのかね!? では一緒に昼食でもとろうか!」

「はい。一緒にさせていただきます」

昼休み、パンを持って神楽さんの教室へ向かいます。

「しかし舞君、君のクラスに昼食をとにするような友人はいないのかね?」

「はい。目下のところ」

「うーむ……」

神楽さんはなにやら悩んでいます。私自身はそこまで気には  
いません。必要ならばその時に考えましょう。

「なんだお前、また来たのか……」

「はっはっは！ この神楽龍一、決して自分を抑えることはないか  
らね！」

「威張れることではないな」

「でも、楽しそうです……」

神楽さんと吹奏楽部へ行くと狭山さん達がいきました。小夜さんも  
話しかけられる人が相手だと楽しそうです。

……それにしても、狭山さんの顔は犯罪級ですね。できることな  
ら神楽さんと

「おーい、市原、なにぼーっとしてるんだ」

「……いえ、なんでもありません。少し考え事をしていました」

「……そうか。あまり考えに熱中するとぶつかるとぞ」

そうです。

再び神楽さんや三途川さんと話を始める狭山さん。そういえば狭  
山さんと三途川さんは同居していましたね。

「……三角関係もいいかもしれません」

もちろん狭山さんは総受けで。

「あのー、舞さん、さっきから不穏な独り言が漏れてますよー」

声をかけてきたのは辻さん。これは失礼しました。

「いやー、しかしあれですねー。舞さんも相当アレな思考回路して  
ますねー」

そうでもありません。辻さんも狭山さんは受けだと思いませんか？

「まー男の同士は置いておいても、確かにいじめたくはなりません  
かねー」

「やはりそうですか」



「……お前ら、さつきから何の話をしているんだ？」

どうやら話の内容を狭山さんに聞かれてしまったようです。笑っているつもりなのでしょうが怒りで顔がひきつっています。

「いや、センパイっていじられキャラだなーと思います」

「総受けにこれほどふさわしい方もいないと思います」

「……言わせておけば……」

大変です。そろそろ狭山さんの自省心が尽きかけてきました。別に怒鳴られても怖くはありませんが。

「貴方たち、いい加減に練習したらどうか？」

と、丁度松崎さんが入ってきました。見回ってばかりで自分の練習はしているのでしょうか。

「やあやあ静流君！ 今日もお勤めご苦労！」

「別にあなたに誉められるためにやっているわけではないわ。部員の練習の邪魔をするなら帰って頂戴」

松崎さんとしては真剣なのでしょうが、そんな理由で神楽さんを邪魔呼ばわりするのは正直不愉快です。

「はっはっは！ では諸君、練習頑張ってくれたまえ！」

はい！！

「まったく……」

結局神楽さんは帰ってしまいました。

「あいつ、行った？」

「よ、狭山、練習お疲れさまー！」

松崎さんが行ってしまったのと引き替えに藤阪さんと桜乃さんがやってきました。

「今日は随分遅かったじゃないか」

「ジュース買いに行ってたのよ」

藤阪さんと直樹さんは何というか、お嬢様とそれに逆らえない下僕といった感じがします。

「……それも大いにあります」

「……あら、あんたどうしたのよ？」

「い、いや、なんか悪寒が……」

「おいおい、風邪かー？ 勘弁してくれよー！」

「馬鹿には移らないから心配ない」

「それもそうね」

「……あんたら、酷くね？」

「ただいま」

「お帰り舞君！ 練習はどうだったかね！？」

家に帰るとリビングには我が物顔でテレビを見ている神楽さんの姿が。特に変わったことはありませんでした。

「夜ご飯にしましょう。舞、手を洗ってきなさい」

「はい」

ガチャ。

「ただいまー」

「お、父君が帰ってきたようだね！ 豊氏、早くどうぞ！」

「まったく、神楽くんには敵わないな」

神楽さんとお父さんはとても仲良しです。この調子なら将来も安泰でしょう。

「さ、ご飯ですよ」

いただきます！

## 霊媒様はかく過ごせり（後書き）

「かく語りき」を連載していると、こちらがほとんど更新停止しているような錯覚を覚えるのですが、実際はどうなのでしょう？

どうも、ガラスの靴です。

残念ながら拓斗くんやすみれちゃんの日常をやっても分量いかないうんではらくお預けにして、過去話いっちゃおうかと思っています。リクエストあつたし。

なのでどうしても桜乃弟の話が見たい人はメッセージとか感想とか送って下さい。頑張って書きます。

あと別にどうでもいい人もメッセージとか感想とか送って下さい。頑張って書きます。返信を。

ではでは。

## 死神様はかく過ごせり（前書き）

これが2007年最後の更新になると思います。

番外編という立場ではありますが、こちらでも新しい魅力を出していけたらなと思っています。

読者の皆様、来年も是非ともよろしく願います！

では死神様のお話です。

## 死神様はかく過ごせり

「黄泉さん、朝ですよ」

「わかった」

朝、小夜に起こされて目覚める。といっても常に半分は意識を覚醒させているが。

「玉藻さん、朝ですよ」

「あとごふん」

「直樹さん、朝ですよ」

「……………」

この家の住人は朝に弱い。

ピピピピピピピ……！

やがて7時になり、狭山直樹の目覚ましが鳴り響く。

「……………朝か……………」

「……………うにゅ……………？ もうそんな時間なのか？」

「直樹さん、玉藻さん。朝です。起きて下さい」

文句一つ言わずにこの低血圧コンビを起こす小夜はまさに理想の妻と言えよう。

「朝ごはんできてますよ」

「ああ。おはよう死神」

おはよう。早く食べる。

「俺はお前と違ってせかせかせかした朝は嫌いなんだ……………」

そのためなら出掛ける1時間前に起きるのか。ある意味では見上げたものだ。

「煩い。そういうお前は準備も早いくせになんでこんな時間から起きてるんだ」

「それはお前達が始まるからに決まっているだろう。生活時間を合わせるのは共同生活の基本だ」

「なんかお前に正論言われると無性に腹が立つんだが……………」

そうかもしれないな。

「では、行ってきます」

「行ってくる」

「きちんと留守番してろよ」

「うむ！　いつてくるがよい！」

朝8時。俺達は玉藻に見送られて家を出る。

「この生活にもすっかり慣れたな」

「なんだ、藪から棒に」

小夜が来て、俺が来て、玉藻が現れ、ここ数週間の出来事とは思えないほどの変化が起きているにもかかわらず狭山直樹は見たところそれまでの生き方となんら変わらない生活をしているように思える。

「いろいろありましたねー……」

「最初に会った時は殺してやろうかと思ったな」

正直俺には人を生と死以外で分ける意義が見当たらないが、この2人の言う通り最低限の犠牲で守護するよう努力はしている。

「というか、お前に直接守られたことなんてないような気がするんだが……」

「俺が目につく危険はあらかじめ刈り取ってあるからな」

予防というのはなくなつて始めてその存在に気付く。何かに似ている気もするな。

そのような会話をしている間にも狭山直樹の周りには俺と小夜に引き寄せられた厄が集まっている。時折それらを消しながら俺達は通学路を進んでいった。

「おはよう」

「おはよー、狭山くん、三途川くん」

「うつす」

教室に入ると同級生達が口々に朝の挨拶を投げかけてくる。まさかこの俺がここまで人間と関わりを持つとは思わなかった。

「狭山、黄泉。おはよう」

「ああ、碧海。おはよう」

「おはようございます」

碧海凜がこちらに挨拶をする。この女は退魔士で相当の手練だが、普段の学校生活ではそのようなことを一切表に出さずに生活している。俺が見逃した厄が狭山直樹に降りかかるような時には、例えば不良と呼ばれる生徒が狭山直樹に危害を加えそうな時に代わって護衛をしてくれているため、あながち軽視できない。

「どうした黄泉。私の顔に何かについているのか」

「なんでもない」

「ふいー。セーフセーフ」

やがて始業ベル間際に狭山直樹の友人である桜乃響がやってきた。

「あれ。藤阪の奴まだ来てないのか？」

「ああ。最近ようやくマシになってきたと思っただけだ」

どうやら狭山直樹は毎朝自分が起きると同時に携帯メールを藤阪葵に送っているらしいが、効果のほどは薄いようだ。

「惜しいわ。あとちよつとで間に合ったのに」

「まずその基準を改めろ」

そして遅刻しても反省の素振りを一切見せない藤阪葵。これで高3まで無事に進級できているのが驚きだ。

「やあやあ直樹氏！ 今日久しぶりにこの時間帯に来てみたよ！」

「無駄な試みだったな。市原連れてとつと自分の教室に帰れ」

神は何を考えているのか、人間と共に暮らす最高神など聞いたこ

とがない。人間と共生するのはせいぜい九十九神のような下級神だ。  
「うん！？ 黄泉君、なにやら難しそうな顔をしているね！？ あまり若いうちから悩んでいても人生いい事がないよ！！」

俺は既に200年以上存在しているのだが、それもこの神に言わせればまだまだ年端もいかないということだろう。

「おい三途川。オレは吹奏楽部見に行くけど、お前はどうすんだ？」

「いや、帰らせてもらおう」

「そうか。それじゃまた明日な」

「ああ。また明日」

部活には神がよく訪れるため、よっぽどのことがない限り狭山直樹に危険なことは起きないはずだ。それでも箒の直撃を受けそうになったりトラックに轢かれたりしているが、それ位は小夜を憑けている以上諦めてもらおう。微々たる物だ。

遠くから「どこが微々だ」と魂の叫びが聞こえてきた気がするが、気のせいだと割り切って家へ帰る。

「……む……」

家へ向かって歩いていると、前方に不審な霊魂が見えた。

「死んでから1週間は経過しているようだ……。今ならまだ存在の消滅は免れるか」

そこにいたのは厄に喰らい尽くされそうになっている魂。おそらく先週辺りに報道された飛び降り自殺者のものだろう。暫く探していたのだが、ただでさえ自殺者は魂が脆い上に中々見つからなかったのもう喰われたと思っていた。

「随分と強固な魂だ。未練の残った被害者でも1週間経てばこれ以上で消耗しているものだが……」

未練の残った者だけが幽霊となるわけではないが、この世への執着が強ければ強いほど魂も強固なものになるのは確かだ。生への渴



望にせよ、殺人者への恨みにせよ。

「もしかしたら自殺ではないのかもしれないな……」

死神は魂を確実に冥府へ送り届けるのが本来の仕事だ。執着の強い魂を安全にこの世から切り離すため、魂の情報を読み取る術を持っている。もつとも小夜のように幽霊として舞い戻った者に対しては使えないが。

靈魂の情報を切り拓く。

「……………」

マンシヨンの一室。

訪れた知人。

ベランダ。

植木鉢を振りかざすその男。

「……なるほどな」

流石に鮮明なイメージは浮かばなかったが、いくつか断片的な映像は頭に入ってきた。その事件は確か屋上からの飛び降りと報道されていたはずだ。

「……その未練、確かに受け取った」

『 容疑者は被害者をベランダから突き落としたのち、屋上に被害者の所有物を置いて自殺に見せかけたとされ 』

「あ、これ、この前近くであった飛び降り事件の話じゃないですか？」

「そうだな。自殺に見せかけた他殺か。そんなものが成功するのはミステリー小説の中くらいだ」

「みすてりー小説なら絶対に失敗するのではないか？」

「……もののたとえだ。あまり気にするな」

『 ベランダの植木鉢からは被害者のものと思われる血痕と容疑者の指紋が残っており、警察では衝動的な犯行として 』

「こわいですね……………」

「幽霊が怖がってどうする」

「ゆ、幽霊だってこわいものはこわいんです！」

「そうかい。で、殺人のプロ。お前としてはどうなんだ」  
人を殺し屋のように言っな。

「そうだな……」

「なお、警察ではこの情報を届けた目撃者の確認を  
魂は見ている、と言ったところか」

□

## 死神様はかく過ごせり（後書き）

次回から「死神探偵ヨミ」が始まります。  
嘘です。

半分くらいでネタが尽きたので適当にぶらぶらさせてたら探偵の真似事始めましたよこの死神。

最後本人は格好いいこと言っただと思っただけですが主人公達には訳が分からないという顔をされます。

では本編より一足早く失礼します。  
よいお年を。

## 妖狐様はかく過ごせり（前書き）

下手したら1ヶ月ぶりくらいの更新です。

本編をごらんになっっている方には何故1ヶ月もほったらかしにしておいたのかなんとなく察しがついてしまいそうですが、なんにしても申し訳ございませんでした。

では、とある妖狐の冒険をご覧ください。

## 妖狐様はかく過ごせり

「玉藻さん、朝ですよー」

「うにゅー……」

小夜の声が聞こえる。

ピピピピピピピピピ……！！

そのしばらくあとにあやつの部屋から目覚まし時計の音。

「……もうこんな時間なのか……」

朝は眠い。これは紛れもない真実である。

「なぜわらわまで起きなければならぬのじゃ……」

偉大なる妖狐、玉藻様の朝はこうして始まるのじゃ。

「玉藻さん、お皿を出してください」

「うむ。深皿でよいのか？」

「はい」

ばか2人が机について親の帰りをまつ雛鳥のようにぼーっとしているのに対し、わらわだけが小夜の手伝いをしており。やはり人間や死神には真似できないことなのじゃな。

「直樹さん、朝ごはんが出来ましたよ」

「ああ。頂きます」

「はい。召し上がれ」

「……………」

ばかを見ている時の小夜は妙に嬉しそうじゃ。そんなに面白い顔には思えんのじゃが。

「玉藻、どうした」

「なんでもないぞ」

死神も何のために学校とやらに行くのかよくわからんな。

「それでは玉藻さん、いつてきます」

「行ってきます」

「行ってくる」

うむ。行ってくるがよい。

玄関の扉が閉まる。

こうなったらもうあとはわらわの時間じゃ。居間に戻っててれびをつける。

『さて、今月起こった殺人事件ですが、容疑者は新たに証拠隠滅のため部屋の指紋をふき取っていたことを供述しました』  
『てれびではいつも似たような事件が起きておる。わらわは人間どもにいつか復讐をするために、今はひたすら人間の文化を学ぶのじや。』

適当にちゃんねるをいじくる。

『三鷹さん、はい、あーん』

『よせよ、照れるじゃないか』

『ははは、中野さんも三鷹も、随分見せ付けてくれるじゃないか』

『いやだわ四谷さん、そんなこと言って』

『いやー、羨ましいね』

『お前もそのうち相手が見つかるさ』

てれびでは男と女が同じ弁当でごはんを食べていた。どうやらそういう食べ方が羨ましいものらしい。

『今度小夜にすすめてみるかの…』

さらにちゃんねるを変える。

『見て下さいこの透き通っただし汁！ 美味しそうですねー』

「……」

「……………」

次のちゃんねるでは近頃話題らしいうどん屋のりぽーとをしていた。

『ほらこの油揚げ！ だし汁が染みこんでいてジューシーな味わい』

です!』

「……………!!」

『店長の斉藤さん。この油揚げはどのように作っているんですか?』

『はい。北海道産の大豆を使って、秘伝の作り方で手作りをしているんです』

「……………」

『なるほど! それが美味しさの秘訣なんですね! 以上、いま話題のきつねうどんでしたー!』

「……よし」

ほかの部屋から服を引っ張り出す。

帽子をかぶり、念のため笛も持っていくとしよう。

「……尻尾が入らんのか……」

……ま、なんとかなるじゃろ。

「待っておれきつねうどん! 今わらわがじっくりと味わいにいつてやる!」

ガチャ……。

「……………」

玄関の扉をそつと開け、外に人がいないかどうか確認する。

「でさー、アイツったらそんなこと言ったのよー!」

「えー!? マジー!? 超ウケるー!」

「……………!!」

ボタン!

急いで扉を閉め、人間が通り過ぎるのを待つ。

人間どもに無用な恐怖を与えるのもどうかと思うのじゃ。断じてわらわが恐れているわけではない。

「むむ……………」

もう一度、確認。

「……………今度は誰もおらん」

帽子が変になっていないか確認して、素早く外へ出た。

「……よ、よし。今行くぞきつねうどん」

一歩踏み出しさえすれば、あとは簡単じゃ。そのままもう一歩踏み出せばよい。

わらわはうどん屋に向けて意気揚々と歩き出した。

「……どうすればいいのじゃ……」

なんとなく歩いていくと、人がたくさんいる場所へ着いた。それは別に構わぬ。問題なのは、

「うどん屋はどこにあるのじゃ……」

そう、どこにいけばきつねうどんを食べられるのかまったくわからないのじゃ。

「うう……」

さつきからじろじろと人間どもに見られている気がする。どこか変だっただろうか。

「ねえキミ、撮影か何か？」

「ん？ なんじゃお主は」

途方に暮れていると、変な男が話しかけてきた。まさかこやつが知っているのか。

「……あ、あつはつは、随分変な話し方だね。キャラ作りかな？」  
「……………」

さつきからこの男が何を言っているのかさっぱりわからない。何の話をしているのじゃ。

「それでね、ボクはその先のお店のスカウトをやってるんだけど、キミかわいいよね。よかったらウチで働いてみない？」

「……いやじゃ」

このわらわが働くななどと、冗談もいいところじゃ。

「まあまあそんなこと言わずに。ね、やってみない？」

「は、離せ！」



「ほら、こんなダサイ帽子なんか取っちゃって」

止める前に、帽子が取られてしまった。周りの人間どもに、耳が見られる。

「みみ？」

「……なにをするかこの無礼者めええ！！」

「えええええ！？」

笛で男を全力で殴りつけ、その場から離れる。目立ってしまった。このままではわらわが妖狐であることがばれてしまう。

「……ハア……ハア……」

気付けば小さな家の中に逃げ込んでいた。ばかの家よりも小汚いの。

「……なんだ？ 客か？」

「のおおお！？ なんなのじゃお主は！？」

突然奥からおやじが現れた。ここはおやじのすみかだったのか。

「なんでえ、客じゃねえのかい。ま、せっかく来たんだ。座んな」

「……………？」

椅子の1つに腰掛けると、おやじは家の奥に行つてなにかを始めた。直後、良い香りが漂ってくる。

「……この香りは……………！」

「……今朝、俺の馬鹿息子がテレビに出てな。……まったく得意気に『秘伝の』なんて言つちまつて。ずいぶん嬉しそうにしゃべつてやがったな。ほれ、食え」

目の前に出されたのはまさしくあのきつねうどんであつた。

「……食べても良いのか？」

「いいつつてんだろ。だまつて食え」

「……う、うむ」

油揚げを、一口。

「……う、うまいのじゃ……！！」

「……そりや良かった。今度は馬鹿息子の店で食ってやんな。少しは喜ぶだろうよ」

夢中で食べ続け、気付いたときには器は空になっていた。

「あ……」

今まで忘れていた。確かものを食べるのには『お金』がいるはずじゃ。わらわの手元にはまったくない。

「……あ、あの……」

「……なあに、お代は結構。葉っぱ出されたんじゃたまらねえからな」

「……？」

「……なんだ、ありや迷信だったのか。まあいいさ。とつとと帰んな」

「え、えーと……ごちそう、さまでした」

「……おう」

「玉藻……！！」

「痛いわ……！！いきなり何をするんじゃ……！！？」

「いきなりもなにもあるか……！！なんで俺の部屋に衣服がこんなに散乱してるんだよ……！！」

「そ、それは……」

「ま、まあまあ直樹さん。玉藻さんもきつとわざとやったわけじゃ

……」

「……まったく……」

怒りつばいやつめ。かるしうむが足りないからそうなるのじゃ。

「そうそう玉藻さん。今日学校の近くにうどん屋さんがオープンしたんですよ」

「そうなのか？」

「巷で大人気のチェーン店らしくてな。社長はとあるうどん屋の息子だったが、売り上げの悪い父親の店に愛想を尽くして家を飛び出

していったらしい」

ふむ。

「そっぴや、なんて言っただけ。学校前の店の店長がチエーンの社長だっけか。ふざけた会社だ」

「なにかあるのだろうな。秘伝の油揚げ、あれも社長の父親の店の作り方らしい」

「それで、ていくあうと？ で、買ってきたんです！ はい！」

「なに！ た、食べていいのか？」

「もちろんです！ いま準備しますからね」

小夜たちが買ってきたきつねうどんの香りは、不思議とあの店のきつねうどんに似ていた。

## 妖狐様はかく過ごせり（後書き）

お店の油揚げって仕入れてるんでしょうか？

どうも、ガラスの靴です。

死神といい妖狐といい、ただ一日をリポートしてるだけじゃ半分以上ないこの退屈軍団。

次回はお嬢様のわりと暇な一日をお送りします。

## 吸血鬼様はかく過ごせり（前書き）

凄くお久し振りで。

でもこちらは毎回こんなノロノロペースだったかもしれませんね。  
さて、吸血鬼でお嬢様な方の一日が始まります。

## 吸血鬼様はかく過ごせり

朝。

日の出と共に、私の意識は目覚める。

コンコン。

「お嬢様。お起きになれましたか」

「ずっと起きてたの」

私の体はちよつと特別。でも私にとってはこれが普通。

「朝食の用意が出来ておりますが、お召し上がりになりますか」

「うん。いま行くの」

なんととはなしに眺めていた窓を離れ、私は高橋さんのあとをついていく。

このお屋敷は私が生まれたときからここにあった。

お母様もお父様もどこか遠くの国へ行ってしまうてあんまりない。

だから、ここには私しかない。

「お嬢様、いかがなされましたか」

「うっん、なんでもないの」

ごはんを食べている時にボーっとしてちゃいけないの。

私がごはんを食べている間、高橋さんは立つたままで動こうとしない。

前に、それでは疲れる、と言ってみたら、これが私の仕事ですの  
で、と言われた。

仕事は疲れるみたい。

このお屋敷には他の人もいたような気がするんだけど、あんまり  
見たことがない。

あるのは高橋さんくらいだ。

「お嬢様。今日はどこかへお出かけになれますか？」

「……うん。いいの」

ちよつと前までは、何かと外へ遊びに行った。

私の知らないことが、いっぱいあったから。

でも、今は大丈夫。

私の知らないことを、いっぱい運んでくれる人がいるから。

「……左様でございますか」

高橋さんが食べ終わったごはんを下げると、私は自分の部屋へ向かう。

「……今日も来ないの」

あの人は、滅多に来ない。

私の知らないお話をたくさんしてくれるあの人。

お屋敷の門から玄関までを一望できるこの部屋の窓に映るのは、ずっと変わらない景色だけ。

「早く来てほしいの」

どうして来てくれないのだろう。

私が待ってれば、きっと来てくれる。

きつとそう。

「……お嬢様、昼食のお時間です」

「……まだいいの」

「……かしこまりました」

それからしばらくして、また高橋さんがきた。

今度はお昼ごはんを食べさせられた。

「それではお嬢様、私は買い物へ行つてまいります」

「うん。わかつたの」

高橋さんがいなくなる。

私はまた自分の部屋に行く。

「……今日も、来ないの……」

どうして。

私はこんなに待っているのに。

……待っているだけでは、だめなのだろうか。

「……待っているだけじゃ……」

キイ。

「……っ」

その時、門が、開いた。

私はすぐに玄関に向かう。

ガチャ。

「よ、久しぶり」

「お久しぶり、なの」

来た。

来てくれた。

「まあ厄病神もいるんだけどな」

ナオキがそう言っただけだと右肩のあたりを見る。

「こんにちは」

私もそこに向かってお辞儀する。

「今日はな、駅前で高橋さんの車を見つけたんだ」

「そうなの？」

「それでな、最初は乗っけてもらおうかと思ったんだけど、自分で歩いてきた」

どうして。

乗せてもらえば、待ってるだけでいい。

なにもなくていいのに。

「なんというか、待っているだけじゃ、何も得られないだろ」

「……」

「自分で何かして、初めて良かったって思えるんじゃないのか」

「……そう、なの？」

「たぶんな」

ほら、また、私の知らないこと、一つ。



それなら、私も、歩いてみるの。

「あーもうまた変なことを覚えさせて……」

「あれ？」

「お変わりに、なれました？」

もう日暮れだ。

「で、変なことってなんだ」

「お前が最初に言ったことだ」

不思議な顔をするナオキ。

こいつは本当に天然のバカだ。

「あ、もしかしてネーベルさんの家に歩いてきたって言ったことじゃないですか？」

「それがどうかしたのか？」

「まったく……」

アイツはそもそも外出が苦手だ。

一時期はそれを無理して外をうろついてたが、ナオキが時々遊びにくるようになってからはそれも多少落ち着いた。

だというのに。

「またお前は外出を奨励するようなことを言うし……」

「引きこもりよりマシだろ」

日焼けした吸血鬼なんて死んだ方がマシだ。

「まあいい。それより血を吸わせろ」

「断る」

無駄な抵抗をしてくるが所詮人間、私の力に勝てるはずもなく。

「厄病神……今度は絶対日暮れ前に帰るぞ……」

「あのー、直樹さん、大丈夫ですか？」

私が血を吸ってしばらくは昼間も吸血鬼の性質が残るが、まあ許せ相棒。

「で、私はいつものようにこれから散歩に出かけるんだが、お前ら

は帰るか？」

「お前……俺が帰ったらまた他人の血を吸うだろ……」

……お前、帰った方がいいんじゃないのか？

月の光というものはいい。体の中から力が溢れてくるようだ。

「満月はもうしばらく先か。待ち遠しいものだ」

「は？ 月見でもするのか？」

そんなものの月の力もよく分かってない人間のすることだ。

「まあ今にわかるさ」

よくわかっていないという顔をしているナオキを背に歩き続ける。すると、前方に若い女の影が見えた。

「ん？」

「あれ、碧海？」

「凜さん、どうしたんでしょうか？」

前にいたのはいつかの退魔士。相変わらず無駄に殺気を向けてくる。

「お前たちは……。相手は吸血鬼なんだぞ。少しは警戒しろ」

「言ってくれるね。人間ごときが警戒したところで結果は変わらないさ」

「うお、すごいな……。ネーベルの奴、碧海の半分くらいしか背がないみたい ガハッ！」

余計な事を言う奴は始末しておく。

「さ、狭山！」

「お前……いきなり何を ギャア!？」

二撃目を入れた時点で標的は沈黙した。

「直樹さん、今のは自業自得では……？」

そうだな。その通りだ。

「それで、退魔士が何をやっているんだ？」

「見て分らないのか。なら教えてやろう。お前が一般市民に危害

を加えているらしいのでな、パトロールだ」

おかしいな。血を吸った人間の記憶は消しているはずだが。

「ちなみに情報提供者は狭山だ」

「……………」

あんなのに相棒はご執心なのか。泣けてくる。

「さて、それなら私は行くでしょう。せいぜいパトロール頑張ってくれ」

「ま、待て……………」

そうそう。小夜とナオキも置いておくから、あとは頼んだぞ。

「……………お、おのれ！」

「う、うーん……………」

「狭山、気が付いたか」

「大丈夫ですか？」

「あ、ああ……………」

ナオキの意識が回復したようだ。

まあもともとそんなに強く攻撃したわけではないからな。人間は脆い。少し力加減を間違えるとすぐ壊れてしまう。

そうすると後が面倒に。これだから人間は。

「どこか痛むところはあるか？ なんなら私の家で治療するが」

「いや、いいって。そこまでしてもらうほどのことじゃないしな」

「……………そうか」

「直樹さん、本当に大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。それじゃ碧海。早めに切り上げて帰れよ」

「……………ああ。分かっている」

ここまで上空で霧となつて見ていて思う。

あの退魔士の中でナオキの存在が大きなものとなっているのは明白だ。

それこそ、一般的な人間ならすぐに気付くくらい。

それでもあの男はまったくそんなことを意識していないようだった。

「鈍いのか？」

……いや、違う。

人の感情に対してどちらかといえば常人以上の感覚を持っている。それなのに……そう、人の好意を察知する能力だけが異常なほど欠けている。

「……無意識に壁を作っているな」

なにせよ、ハードルは高いぞ。  
頑張り相棒。

## 吸血鬼様はかく過ごせり（後書き）

吸血鬼は不老不死、そして眠る必要がありません。

その代わり昼と夜で精神が違うので実質半日は寝てたり。

ちなみに昼と夜とで性格が違う吸血鬼は特別なもので、本来なら昼も夜も人格は変わりません。

さて、これでひとまず過ごせり編は終了です。

これからまずは主人公とヒロインの出会いなんかをやっていききたいと思っています。

この続きか新しく連載にするかは置いておいて。  
ではまたー！

## 退魔士様はかく出会えり（前書き）

お久し振りです、ガラスの靴です。

結局これ以上番外編で作品数を増やすのもなんだかという気がしたので、番外編はここで載せていきたいと思っております。  
では過去話第1弾、どうぞ。

## 退魔士様はかく出会えり

それは中学に入って暫くしてからのことだった。

「お、おい！　今、1年の男子が3年の先輩数人に囲まれて……！」

「え！？　せ、先生は！？」

「今呼びに行つた！　でも間に合うかどうか……！」

どうやら1年が3年に生意気な態度を取つたらしい。いつの世でも権威に逆らう奴はいるようだ。

私は退魔士だ。人に害悪をもたらす存在を断ち切る者。無用なことに使ふべき力ではない。

だからその時、その現場に行つたのは、本当に気まぐれと、そしてほんの少しの偽善からだつた。

「オイ！　1年の分際でずいぶんナメた態度取ってくれるなあ！？」

「2年やそこら早く生まれただけだろ。今の世の中年功序列は通用しないぞ」

「こん……のクソガキ……！」

「だいたい集団で女子をナンパするなんて脅迫罪に近いことを平気でやる奴らに礼儀を教えてもらつ筋合いはない」

「正義の味方気取つてられるのも今のうちだぞ……！」

どうやらちよっかいを出されている女生徒を助けに入つてこんなつたらしい。

「誰が正義の味方か。俺はただ通行の邪魔になつてたから無理やり通ろうとしたら偶然持っていた筆箱に入っていた鉛筆がお仲間の脳天を直撃してしまっただけだ」

「なんで昼休みに筆記用具持つてうろついてるんだよっ！？」

「……おそらく、いや、たぶん。」

「……ところでさつきから俺たちのことをじつと見てるあの女子もお前らの仲間なのか？」

「あん？」

1年の男子がこちらに気付く。不良たちも一斉にこちらを見る。5人か。まあ問題はないだろう。

「なんだ嬢ちゃん。見せ物じゃないんだぜ？」

「帰んな帰んな。それともお嬢ちゃんが俺たちの遊びに付き合ってくれるか？」

私を知っている人間ならば素直に退いてくれるだろうが、そうもいかないらしい。

「その男子は悪気があってやったわけじゃないだろう。離してやったらどうだ」

「そんな嬢ちゃんに言われて従うことじゃねえなあ」

「そうだな。少なくとも俺は狙ってやった」

「……………」

なんだというのだろう、この男は。このまま男達に殴られるのが目的なのか？

「その1年。そうしているのもしや殴られたいからなのか？」

「お前も1年だろ……。残念ながら俺に被虐趣味はない。だから出来る限り言いたいことを言って鬱憤を晴らしている真っ最中だ」

なんとも捻くれた頭をしているらしい。

「で、お話は終わりかな？」

「お嬢ちゃん、あんまり関わりと痛い目見るぜ」

「ふう。正直こうなるとは思ってたな……」

「はっはっは！ 軽々しくこういう現場に踏み込むところな　　ガッ！？」

詰め寄ってきた男に回し蹴りを喰らわせる。

「……誰でもいいから助けて欲しいと言うくらいやられきった後だと思っていたんだが」

「んだこの女！？」

「このやろっ！ 怪我したってしらねーぞー！」

「私が相手になろう。話はそれからだ　　」



「おお……まるで映画だな……」

1分後。私の周りには先ほどの不良たちが5人、大の字になって倒れていた。

「大丈夫か？」

「正直これだけ見るとお前の方が大丈夫かと訊きたい」

手を伸ばすがそれを無視して立ち上がる。随分余裕だな。

「こんな頭の悪い連中に舐められたら不愉快だからな。お前こそ」

ストーン。

男子は再びへたりこんだ。何をやっているんだ？

「……笑うなよ」

「出来る限りはな」

「……腰が抜けた」

……。

「……ぷっ、クスクス……！」

「わ、笑うなと言っただろうが！」

その男子　狭山直樹と会ったのは、この時が最初だった。

「くそ……俺は頭の悪い連中なんか」

「馬鹿なことを言っていないで大人しく寝ている」

ここは保健室。先ほどの男子をベッドまで運び、保険医を呼んだところだ。

「それじゃああとはわたしに任せて、あなたは教室に戻りなさい」  
「わかりました」

保険医の指示に従って教室へ戻る。

ザワ……！

私がドアを開けた瞬間、教室の空気が変わった。恐らく私が不良を倒したということが知れ渡っているのだろう。

「……………」

そういったところで今までと何も変わることはない。今まで通り、誰も私に近寄らないだけだ。

「えー、狭山はちよつとした事情でいま保健室にいる。5時間目が終わる頃には戻ってくると思うから、心配しないようにとのことだ」  
5時間目、入ってきた教師がクラスにそう伝える。あの男子はこのクラスだったのか。それさえも知らなかった。

ガラッ！

「お、狭山。生きてたのか」

「人を勝手に殺すな。別になにもされてない」

「でも保健室にいたって……」

「……それはまあ、大事を取ってというやつだろう」

「なんで自分のことなのに推量形なんだよ……」

狭山というらしいその男子は教師の言っていた通り5時間目が終わるとすぐに教室へ戻ってきた。もうすっかり立てるようになったらしい。

「お、いたいた。なんだかんだでさっきは助かった。礼を言う」

「え……？」

ちらりと見たただけですぐに顔を窓の外へ向けた私に、そんな言葉がかかってきた。

「……わ、私に言っているのか？」

「他に誰に言えばいいというんだ。影武者でも雇ってたか？」

「い、いや、そうではなく、私は礼を言われるようなことはなにも……」

「ま、お礼っていうのはする方がお礼だと決めればお礼なんだ。気にするな」

なにやらよくわからないことを言っただけで狭山は自分の席へ戻っていた。

「お、おい、狭山。よく碧海に話しかけられたな……！？」

「あいつ、なんだかよくわからない暗さがあるじゃん……」

背後から声が聞こえる。本人達は聞こえないように行っているつもりなのだろうが、幸か不幸か私の耳は鍛えられている。全て聞こえてしまうのだ。

「なんだそれは。そんな評判関係あるか。助けてもらったから礼を言う。そのどこがおかしいんだ」

「いやまあ、おかしくはないが……」

「だったら変なことを言うな。あまり変なことばかり言っていると変な人間になるぞ」

「いや、狭山も充分変な人間だからさ……」

「なに！？ 俺はまともだ！！」

絶対に違う。

そう突っ込みたくなるのを必死にこらえるその気持ちは、初めて起こったものだった。

「大変だ！！ 狭山がまた3年に！！」

「あいつは……」

「なんか呪われてんのかね……？」

数日後、再び教室に危険な知らせが飛び込んできた。恐らくまた何かやらかしたのだろう。

「お、姉ちゃん。来たな」

「俺たち、お前さんに用があるんだよ」

この前と同じ場所にいつてみると、この前と同じ不良たちがいた。どうやら用があるのは私の方だったようだ。

「よかったな。『嬢ちゃん』から『姉ちゃん』にレベルアップしたぞ」

「なんでお前はそう余裕なのだ……」

そして不良たちに胸倉を掴まれながらも平然としている狭山。な

んとなく3年の神経を逆撫でするのも分かる気がする。

「この前は随分と恥をかかせてくれたじゃねえか。今度は本気で行くぜ」

「そうか。まだ懲りていなかったか。では行くぞ」

「せ……戦闘シーンすらねえ……」

意味の分かりかねる台詞をつぶやいた不良はそのまま崩れ落ちた。

「おお、やっぱり強いな」

「……これくらい普通だ」

そう。私にとってはこれが普通。

周りの人間にとっては脅威に見えるだけだ。

「……よし、決めた」

「何をだ」

「お礼がしたい。今日の放課後ちよつと付き合ってくれ」

狭山はそれだけ言うたさっさと教室へ帰ってしまった。何をしたいというのだろう。

そして、放課後。

「さ、狭山！ 私はこんなところに来た事は」

「それは良かった。お礼としての価値も生きてくる」

「わ、私が言いたいのはそういうことではなくだな……！！」

狭山に無理やり連れて来られたのは駅前にあるファーストフード店。こんなところに来たことはないから、どうすればいいのか全く分からない。

「まあまあ、注文は俺がするから、何を食いたいか選んでくれ」

「……といっても……」

色々な食べ物の写真が並んでいるが、どこがどう違うのかすら分からない。

「……すまない」

「いや、何故謝る？」

結局狭山に選んでもらい、狭山の案内に従って席まで移動する。

「……ず、随分と辛いのだな……」

「慣れてない人間にはそう感じるかもな」

これがファーストフードというもののなのか。不思議な味だ。

「少なくとも家ではこのようなものは食べたことはないな」

「……お前の家、ひょっとして金持ち？」

違う、と、思う。

「それにしたって、お前ってなんか変な奴だな」

「どういう意味だ」

「いや、普通わざわざ不良に絡まれてる人間を助けに来たりしないだろ。いくら強いつて言ったって」

ただの気まぐれだ。

「……俺は気まぐれで助けられたのか。なんか一気に捨てられたのを拾われた子犬みたいな心境になってきた」

「……お前も、変だな」

「俺は変じゃない！ 普通だ！ 平凡だ！ 烏合の衆だ！」

「そこまで言わなくても良いのでは……？」

その後も狭山は面白い話を沢山してくれた。私もそれにつられて笑った。

「それじゃ、これからよろしくな。碧海」

「ああ。よろしく頼む」

どうやら私という人間にも、親しい友人というものが出来たらしかった。

両親に話すと大変喜ばれた。男だと言った時の父上の顔が少し気になった。

それは中学に入って暫くしてからのことだった。

## 退魔士様はかく出会えり（後書き）

彼らは中学1年の時に知り合いました。

そのまま同じ高校に進み、今の状況にあるわけです。

本当はもっと『人を寄せ付けけない感じ』を出したかったんですが…  
…えらくお人よしな性格に。

ま、いいとしましょう。

とりあえず次回は藤阪、次々回で辻と、時系列にそって書いていきたいと思います。

では次回をお楽しみにー！

気分屋様はかく出会えり（前書き）

どうもこんにちは。ガラスの靴です。

あの出会いから3年後。

再び主人公にお人好しフラグが。

という訳で藤阪さんとの出会い、お楽しみ下さい。

## 気分屋様はかく出会えり

「ここね……………」

中学3年の2月初め、あたしはとある高校の試験会場へやってきていた。

この高校を選んだのに深い理由はない。ただ大学への推薦があるエスカレータ式の学校なら多少楽が出来ると思ったからだ。

その分競争倍率はだいぶ高いようだけど、人間やってできない事はない。落ちたら落ちたで他の高校へ行けばいいのだ。

「よ、藤阪」

「響、あんたもここ受けるの？」

いつの間にかあたしの隣に響が並んでいた。中学で知り合ってたらはよく行動を共にしている。

「そりゃあこの町一番の進学校だしな。受けといて損はないだろ」

確かにね。あたしも大体同じ理由よ。

「えーと……………受付はあそこみたいね。行きましよ」

「おう。……………うー、さぶ……………」

受付で受験票を見せると、本人確認を済ませた後に受験する教室が書いてある札を渡された。

「お、ここでお別れか」

そうみたいね。

「それじゃ、お互い頑張ろうぜ！」

あたしが落ちてあんたが受かったら殺しに行くから。

カツ、カツ。

雪でも降りそうな曇り空が窓から覗く廊下にあたしの足音だけが響く。

「……………少し早く来すぎたかしら。あたしらしくもない」



本来行列とか待機とかそういうのが大嫌いなのだ。このままだと教室で何分も待つ羽目になりそうね。

「……受験票見せた後でも外に出れるのかしら」

ひとまず自分の受ける教室くらい見ておこう。

そう思って札に書かれているのと同じ教室のドアを開ける。

ガラッ！

「……………」

教室にはコートを着た男が1人座っているだけで、他には誰もいなかった。

「こりゃあ本格的に早すぎたわね……」

「……………」

その男はこちらをちらつと一瞥すると再び持っている参考書に視線を戻した。淡白な奴ね。

「今の時間は……げ、まだ1時間以上あるじゃない」

もう駄目だ。どこかで時間を潰そう。おそらく響も今頃暇を持て余しているころだろう。

流石に試験直前の詰め込みをしている人の目の前で電話をするのは躊躇われたので廊下に出て電話することにした。

「試験会場では携帯電話は禁止だぞ」

「は？」

ドアを開けながら携帯を取り出したあたしにその男が注意する。相変わらず目線は参考書に注がれたままだ。

「見つかったら面倒だろ。下手したら受験資格が消えるぞ」

「別にあんたに注意されるいわれはないわよ。見つかったらその時はその時でなんとかするわ」

「そうかい。なら別に止めはせん」

なんだか不愉快な男だ。何というか、雰囲気が。

「あんたこそ、こんな早くから来て、カンニングの準備でもするつもり？」

「そんな馬鹿なことやってる暇があったら勉強してる」

「あ、そ。それじゃあ頑張って」

「だから廊下で電話をするなど言うに」

再び教室を出ようとするとするあたしをまたしてもその男が引き止める。しつこいっての。

「あのね、まだ試験開始まで1時間以上あるのよ？ そんな時に電話しようがなにしようが影響ないと思わない？」

「向こうは思うからそう注意してるんだろ。ここで電話してもいいから廊下に出るのはやめろ」

これは意外だ。参考書しか見ていないが、別に本気で最後の抵抗をしているわけではないらしい。

「それじゃ、お言葉に甘えて」

響の携帯に電話を掛ける。

ブルルルルル。

『おかけになつた電話番号は、現在電波の届かない場所にあるか、電源が切られています。お掛け直し下さい』

……あの馬鹿。こんなときだけ真面目ぶって電源を切っていやがる。

「はあ……」

「出なかったのか」

それ以前の問題よ。もういいわ。さっさと自分の席について一眠りでもしよう。

「……まだ何か用でもあるのか」

「……ここがあたしの席なのよ」

受験票の席番号はなんとそいつのすぐ後ろだった。偶然にしては出来すぎね。

「……そうだ。あんた、のど渴いてない？」

「かなり嫌な予感がするからはつきり言っておくが、一度中に入ったら学校の外には出れんぞ」

「まあまあ。なんとかなるって。それじゃあ、行きましようか」

「待て、俺は外に行くなんて一言も言っていない」

ちっ、つまらん男だ。

「しょうがないわね。じゃあ下のテラスでいいわよ。自販機くらいあるでしょ。」

「最初からそこでいいだろ……」

「つべこべ言わない。とつとと行く!」

「だから何で俺までついていかなきゃならんだ」

「と言いつつも諦めたような表情を浮かべて席を立つ。意外と人付き合い良いのね。」

「はあー、身も心も温まるわー……」

「100円のコーヒーくらいでよくそんなに満足そうな笑みを浮かべられるな……」

何よ、あんたこそ番茶なんて爺婆みたいなもん飲んでるじゃない。

「人の嗜好にけちをつけるな。これでも充分温まる」

ほれみる。自分だって温まってるじゃない。

「む……」

なんとなく勝った気分になってその男を見ると、ポケットに英単語帳が入っているのに気付いた。

「なに? あんたまだそんな悪あがきを続ける気?」

「それは全国の受験生に失礼だろ……。今ここで見た単語が試験に出る可能性だってあるじゃないか」

そんなものに賭けるくらいなら鉛筆転がす練習でもしてなさい。

「そっちの方が訳分からん。全く……」

「と言いながらもそれを開く気配がない。あたしがいるからだろうか?」

「……よし、じゃああたしが試験に出る単語を予想してあげようじゃない」

「……は?」

だから、その単語帳から試験に出そうな単語をピックアップして

やろうと言っただ。

「そんなことしてもらっくらいならいつそ最初から全部やって欲しいんだが」

「ごちゃごちゃ言わない！ ほら、貸しなさい！」

男の単語帳には一つ一つの単語にチェックと小さくメモがしてあった。かなり勉強しているようだ。

「英語なんて一言語の分際で優遇されすぎだと思わない？」

「ロシア語を覚えると言われるよりはマシだと思うがな」

ペラペラと単語帳をめくりながら適当な会話を交わす。むむ、影響の onなんて初めて聞いたぞ。

「よし、それじゃああたしの言った単語がひとつ試験に出るたびに100円貰うわよ！」

「おい、それって多く言えば言うほどこっちが不利じゃないか」

「まずは…… persuade！」

「……人を説得してさせる」

「それじゃあ、available！」

「利用できる」

「次は」

キーンコンカーンコン。

「なんだ、予鈴鳴るんじゃない」

「呑気なこと言ってる場合か！？ あと5分で試験始まるんだぞ！」

「あんただって割とのんびり答えてたじゃない」

「お前が時間把握してると思ったんだよ！ いいから急げ！」

そのまま単語の問題を出していたらいつの間にか1時間経っていたようで、2人で慌てて教室へ飛び込んだ。

「……おや、間に合ったみたいですね。始まってしまっっては手遅れなんですから、気を付けて下さい」

煩いわね。さつさと問題配りなさいよ。

「それでは問題を配ります。受験者の方は問題冊子の表紙に書かれている注意事項をよく読んで」

「それで、自信はどうよ？」

「まあまあね。受かってれば受かってるでしょ。響、あんたは？」

「オレもそんなところだ。ほら、見に行こうぜ」

試験の2日後、あたしは合格発表を見るために再びあの高校へ訪れていた。

「えーと、318……318……」

掲示板の周りには落とした飴に群がる蟻のように人が押し寄せていた。動きにくいつたらありやしない。

「だあー！ また見失っちゃったじゃない！ あるのかないのかはつきりしないよ！」

「318ならあつたぞ」

「はい？」

横から不意に声がしたので首をぐるんと回転させると、そこにはあの男がいた。

「なによ、嘘だったら承知しないわよ」

「試験にお前の言った単語が出まくったせめてものお礼だ。ここで嘘を言つても後で電車のホームから突き落とされるだけだしな」

それはそうだ。お礼は試験の後にファーストフードを奢らせたので終わったと思っていたんだけど。

「えーと、あ、ほんとだ。318番あつた」

「お前、少しは人の言葉も信じろよ……」

あたしは自分の目で見たものしか信じないの。

「そうかい。大した自信だ」

「それで、あんたは受かったの？」

「ああ。お前のおかげかもな」

見ると、確かにあたしの番号の1つ前も同じ掲示板に書いてある。よかったじゃない。

「なんか軽いな……。合格者はあつちで入学手続きの書類を受け取るんだぞ」

それじゃあたしの分もよろしく。

「本人以外じゃ無理に決まってるだろ。大人しく自分で行け」  
面倒くさいわね。

「おい！ 藤阪ー！ 受かってたかー！？」

受かってたわよ。そんな大声で訊いて落ちてたらどうするつもりだったんだ。

「お？ そっちの男は？ 中学にそんな奴いたか？」

「ああ、こいつは」

そういえば、まだ名前も訊いていなかった。

「あんた、名前なんていうの？」

「今さらだな……。狭山だ」

名字なんて後だっていいのよ。下の名前を聞いているの。

「……狭山直樹」

「そう。あたしは藤阪葵。よろしくね、直樹」

「……で、その狭山ってのは、なんなんだ？」

「ああ。よろしく」

「オーイ……」

こうして、あたしの高校生活の第一歩が始まった。

## 気分屋様はかく出会えり（後書き）

高校受験の場があんな感じでいいのかよくは分かりませんが、まあいいんじゃないでしょうか。

というわけで藤阪さんとの出会いです。桜乃の扱いがおかしいのは気のせいです。

次回は後輩様との出会いです。

後輩様はかく出会いき（前書き）

辻さんのお話です。

まあ彼女も最初はこんな性格だったわけですが。

え？　今も変わってない？

とりあえずどうぞ。



## 後輩様はかく出会いき

「ねーねー、いつもお弁当ひとりで食べてるよね？」

「……はい？」

私がある高校に入学してから1ヶ月ほど経った頃、いつものように自家製のスペシャル弁当を食べようとしていると知らない女子生徒が話しかけてきました。ああ、知らないというのは失礼でしたね、同じクラスの女子生徒が話しかけてきました。どちらにしろ今まで話したことはなかったので顔を知っているレベルですが。

「もしよかったら、一緒にご飯食べない？」

「……なんですか？」

なんなんでしょうこの人は。一人でご飯を食べるのが寂しいと思つてたら同じく一人でお弁当を開こうとしている私を見つけて同じ一人者同士仲良くしようと思ったんでしょうか。

「おーい藤阪、何やってるんだー？」

「あ、拓斗くん、ちよつと待っててー」

ピキツと来ましたね。どうやら私の予想は大きく外れたようです。よそのクラスの男友達がいるのに私に話しかけてきたみたいですね。なんなんでしょう、単に一人者を哀れんでいるのでしょうか？ だったら大きなお世話です。

「彼氏との楽しいひとときを邪魔するつもりはありません。どうぞ2人で楽しんでください」

「ほえ？ 彼氏？」

「……完全に意識なしのようです。本当にこの人はなんなんでしょう。」

「えーとね、なんだかいつもひとりだったから、一緒にご飯食べてみたいなーって思ったんだけど……迷惑だった？」

「迷惑です」

「ええー……」

そんな本気で落ち込まれても困るんですが。

「おい藤阪、お前何やってるんだよ」

と思っただけです。早いところ彼女がやってきました。

「遅かったですね。早いところ彼女引き取ってください」

「か、かの……！ バ、バカ、違ーよ！」

「あれ。私はSheの意味で『彼女』と言ったんですけど。何を一人で勘違いしてるんですか？」

「なっ……！ お、お前、あんな言い方したらそう取られるだろ！」

「そう取られるってどう取られるんでしょうか？ 詳しく教えてください」

「ぐ……」

この女子はよくわかりませんが、こっちの男子は面白いですね。いじり甲斐がありそうです。

「気が変わりました。ご一緒しましょう」

「え？ほんと？」

「はい。どこで食べるんですか？」

「えっとね……」

「やられた……」

まさかその混雑ぶりが早くも1年の間で評判になっている学食に連れ込まれるとは思いませんでした。どうやらあの2人は前からこつやつて昼食をとっているらしいですが、私はずつとお弁当だったのでこんな配給に群がる難民の集団みたいな環境に慣れているはずもありません。あつという間にはぐれました。

「というかテーブルが見えないほどの混雑って何？ 改築した方がいいんじゃないの？」

周りにクラスメイトらしい人はいないので敬語を使う必要はありませんね。文句を言いながらあの2人を探します。

「いない……」

ええ。全然いません。からかわれている気になってきます。まさかどこかから見て楽しんでいるのではないのでしょうか。

その時、私は2人を探すことに気を取られていて重大なミスをしてしまいました。

「わ……っ！」

そう、いい加減鬱陶しくなってきたこの人混みに足を取られてしまったのです。

私はその時お弁当を持っていました。

そのお弁当は私の手を離れ、放物線を描いて飛んでいき。

グシャ……！

「……………」

「……………」

あろうことか途中で包みが解けて空中分解を始め、どっかの誰かの頭に直撃しました。どっかの誰かと言ったのは恐らく男子生徒であらうその人が後ろを向いていて同学年が先輩かわからなかったからです。

「……………」

さて、どうしましょう。

できることならこのまま何事もなかったかのようにこの場を離れたいのですが、せめてお弁当箱を回収しなければなりません、何より私はまだ転んだままです。

「……………」

その人はゆっくりとこちらを振り向きました。そして人混みの中転がっている私を発見したようです。

「…………… お前か、これ」

「……………」

「おーい。お前かつて訊いてるんだがー？」

その人は何か言っているようでしたが私にはどうでもいいことでした。

普段は無神教な私ですが、今日ばかりは神様に感謝です。

ぶつちやけて言いますと、ど真ん中ストレートでした。たとえ髪の毛に卵焼きとブロッコリーの破片がぶら下がってようやく制服の肩からご飯が零れ落ちてようやくど真ん中ストレートです。

「おいこら、いい加減に返事しろ。そろそろこの不名誉な弁当の残骸を処理したい」

「……お名前をお聞きしてもいいですかー？」

「なんでやねん」

「いやー、すみませーん。人混みに足をとられちゃってー」

「まったくだ。おかげで昼飯が台無しだ」

「うーん、顔つきはタイプなんです、性格に難ありですかねー。」

『そんなこと気にしなくていい、それより君のお昼ご飯を台無しにしちゃってごめんね』くらい言っただけです。欲しいんですけど。まあ本当にそんなこと言われたら引きませんが。

「……何か言いたげな顔だな。言っておくが弁当の中身弁償しろとかだったらぶつとばすぞ」

「あははー。まあそれは置いて」

「否定はしないんだな」

「ほんとに大丈夫ですかー？　なんかまだ髪に卵焼きついてますよー」

「誰のせいだと思ってるんだ……」

「さあ。誰でしょうね？」

「はあ……ついてこい」

あれ？　なんか歩き始めました。ひょっとしてこのまま校舎裏に連れて行かれてカツアゲでもされちゃうんでしょうか。だったら容赦しないんですけどね。

とりあえず大人しくついていくとその人は学食に隣接した購買へ歩いていきました。なるほど、代わりのお昼ご飯ですね。

「ちょっと待ってろ」

そう言つとその人は列に入っていました。代わりのパン代を出せとかそんな結果が見えてきましたね。だったら大人しく待っている必要はありません。さつさと退散することにしましょう。

「待てつつてんだろが」

「ええー、早ー」

「早くて何が悪い。逃げようとすんな」

うわ、この人ここぞとばかりにパン5つも買ってますよ。なんてせこいんでしょう。こんな人が将来の日本を背負っていくのかと思うとぞっとしますね。

「……なんか失礼なこと考えてないか？」

「いーえまったくこれっぽっちしか考えてません」

「考えてるじゃねーか！」

よく気付きましたね。

「もういい……ほら、選べ」

「……はい？」

「選べつての。お前も昼飯なくなつただろ」

「……………」

この人は何を言っているのでしょうか。もしかしてそのためにわざわざ5個もパン買ったのでしょうか。

「じゃーカレーパンを……」

「他にはいいのか」

「じゃー全部ください」

「あんま調子に乗るなよ」

残念です。

「ほれ、カレーパンとメロンパンだ。足りなかったら自分で買え」  
パンの定番ともいえる商品を私に放り投げるとその人はスタスタとどこかへ行つてしまいました。お金払わせるのを忘れたようです。  
「……………」もしかして」

もしかして、奢ってくれたのでしょうか。こっちがお弁当ぶちま

けたのに？

「……面白いですねー」

ただ単に性格が悪いだけではないようです。俄然興味が湧いてきました。

顔も合格。性格も面白そう。これで他に何の問題があるでしょうか。

経済力は様子見ですね。ひとまずはうっかり訊くのを忘れてしまった名前から調査しましょう。

「それって、狭山先輩じゃないかな？」

「狭山？」

まずは、教室に戻るといつの間にか帰って来ていた2人に聞いてみることにしました。すると一発で出てきた候補。

「うん。わたしと拓斗くんは1つ上の学年にお姉ちゃんとお兄さんがいるんだけど、狭山先輩はお姉ちゃん達の友達なの」

なるほど、この2人の仲の良さはそういうつながりから来ているんですか。

「何で……僕は殴られたわけ？」

「誘っておいて放置した罪は重いですけどセンパイの情報を教えてくれたので手加減しておきました」

「理不尽すぎるだろそれ！？」

外野は無視です。

「それで、その狭山センパイはどこクラスにいますか？」

「クラス……うーんと、それはよくわからないけど、すぐに会える方法があるよー」

「その方法とは？」

「それはねー」

「 という訳で、辻満月です！ これからよろしくお願いしまーす！」

「 ……な……」

おーおー、驚いてる驚いてる。

「 ……なんでお前がここにいるんだー！？」

「 吹奏楽部に入りたいなーと思って。同じクラスの藤阪さんが紹介してくれましたー」

「 おい藤阪妹ー！ なんでもりによってこいつを勧誘してくるんだー！」

「 えーっと、狭山先輩に会いたって」

「 んなつ……！」

さて、時間はまだまだたっぷりあります。  
それまで。

「 よろしく願いますね！ センパイ」

## 後輩様はかく出会いき（後書き）

顔がよかったからミハー気分で同じ部活の同じパートに入った辻さん。

そのうち本当に惚れてしまったのはまた別の話です。

まあ彼女らしくないといいますが、遊び感覚っぽいのが若干不自然かもしれません、そこは作者の技量不足ということで勘弁してください。

ちなみにすみれと拓斗ともこれをきっかけに仲良くなりました。仲良く？

過去編始まりますとか言っておいてこれでネタ切れなんですけど、  
『これが見たい！』とかありますかね……？

という訳で次回は未定です。ありがとうございましたー！



## 霊媒様はかく出会えり（前書き）

リクエストがあつた舞と神樂の出会いのお話です。  
ちよつとほのぼの分が足りないかもしれないので、そついったものを期待している方はご注意ください。

何も期待していない方は進んでいいと思います。

では、どうぞー。

## 霊媒様はかく出会えり

雨。

アスファルトに降り注ぐ水滴が、思わず耳を塞ぎたくなるほどの音を立てていた。

でも、手は動かなかった。

やけに、撥ねる水滴が顔にかかった。

どうして、私は倒れているのだろう。

どうして、車が止まっているのだろう。

その時、誰かが私の隣に立った。

雨音が、途切れた。

……あなたは、だれ？

「……………」

「……気がついたようです」

「……舞！！」

「よかった……………」

目を閉じて、次に目を開けたとき、そこには無機質なアスファルトはなかった。

「……ここは……………」

「舞！ よかった！」

隣を見ると、お母さんが泣きながら私の手をとっていました。

「……お母さん」

改めて辺りを見回してみると、どうやらそこは病室のようでした。手を取って安心しきった顔をしているお母さん。

白衣を着た人と何か話し合っているお父さん。

そして、入り口のところに立って私を見ている誰か。

「……私は、どうなったんでしょうか？」

「もう大丈夫ですよ。何も気にする事はありません」

目を閉じる前の映像と今の状況を考え合わせれば大体の想像はつくりますが、お母さんが話したくないのなら無理に聞く必要もないでしょう。今のところ左腕がなくなっているなんてこともないですし。「……それでは、明日まで検査入院ということで。お話ししたいこともありますし」

「分かりました。雪絵、行こうか」

「はい。舞、それでは私たちはちよつと行ってきましたね」

「はい。行つてらっしゃい」

お母さんとお父さんが医者について病室を出ると、部屋には私と入り口傍の男の人だけが残りました。

「……………」

「……………」

「……何か用でしょうか？」

「……………」

どういうことでしょう。私が話しかけてもその人は何の反応も示しません。にも関わらずその視線はこちらだけを向いています。

改めて服装をよく観察してみると、その人は白いツナギのような上半身と下半身がつながっている服に同じく白いマントのようなものを着ています。怪しいことこの上ありません。

「……あの、どなたでしょうか」

仕方がないのでベッドを降りてその人の前に立ちました。さっきのお母さんたちの話を聞いている限りでは動けなくてもおかしくないような気がするのですが、痛みすら感じません。

「……………もしもし？」

「……ん？ ひよつとしてそれは僕に言っているのかな？」

やっと反応したと思ったらそんなことをいい始めました。自分の1m手前で目を合わせて発言している人が自分以外に語りかけてい

たら恐怖です。

「その通りです。あなたは誰ですか。そして何故こんなところにいるんですか？」

「ふむ、余計な力を移してしまったかな……？」

質問に答えてほしいです。

「まあよからう！　こうして知り合ったのも何かの縁だ！　君に少し協力してほしいことがある！」

この人はどうやら人の話を聞く習慣がないようです。一方的な話は続きました。

「僕は……そうだね、うん、一種の幽霊さ！」

「そうですか」

「そしていわゆる不幸を運ぶ悪霊なのだよ！」

「そうですか」

「そして運良く君が不幸にも車に轢かれてしまったのさ！」

「そうですか」

「だから、僕は君にとり憑くことにするよ！」

「そうですか」

「……ふむ、意外と驚かないものなのだね。なら次からその手でいこうか」

要するに、可哀想な人のようです。

まあここは病院ですから、そんな人もいるでしょう。

そしてそんな人に対する私の反応はひとつです。

「では、さようなら」

「……君、話を聞いていたかね？」

残念ながら幽霊なら見飽きていますので。

「……君、霊魂が見えるのかね？」

「はい。多少は」

「それはすごい！　ならば僕のことも分かるだろう！？」

「あなたは普通の人間です。幽霊とは見え方が違います」

幽霊（と思しき人）を見ると、その密度というか、そういったも

のがなんとなく薄く、動き方も若干生きている人と違います。

それに対してこの人は完全に私やお母さん、お父さんと同じ動きで、とても幽霊とは思えません。

「……そうか、そこまで違うものなのか……。シー君も同じ手でいけると思ったのに……」

再びブツブツと独り言を唱え始める幽霊の方（自称）。もう帰っていいのでしょうか。

「ならば君！ 改めてお願いがある！ 僕に協力してくれないかい！？」

何に関してでしょう。どうもこの人は自分のイメージを他人に伝える能力が欠如しているように感じます。

もつとも、それはこの人だけの話ではありませんが。

「ん？ どうかしたのかね？」

「いえ、なんでもありません」

その幽霊の方は暫くの間何かを考え込んでいたようでしたが、やがてパツと私の方に向き直り、こう言いました。

「君は神様を信じるかね！？」

「いいえ」

「……………」

何かの宗教団体の方でしょうか。そう思ってみると、確かにこの謎な服装もそれらしく見えてきます。

「……じ、実は、僕は神様なのさ！」

「さつき幽霊だとおっしゃってましたが」

「そ、それはう……え？ なに？ ダメなのかね？」

誰に訊いているのでしょうか。

「……む、しかたあるまい。……とにかく、幽霊と神様の間くらいの存在なのさ！」

「想像できません」

「つ、つまりだね」

「意味が分かりません」

「その」

「あら舞。立ち上がって大丈夫なんですか？」

「大丈夫です。もう傷も塞がったようですので」

「そうですか……。じゃあ、これからもう一度検査をするそうなので行きましょう？」

「分かりました。ちょっと待っていてください」

お母さんが部屋からいなくなると、私はゆっくりと横を見ました。そこには肩で息をしている神様と幽霊の間の肩（自称）が。

「ど………どうかね………？ あ、母君にも、見え、なかっただろう………？」

「最初からそうすればよかったと思うのですが」

「僕も、そう、思うよ………」

なににせよ、この人が人間ではないということだけは分かりました。先ほどのお話も多少は信憑性を増したことでしよう。

「それで、結局あなたは私にどうして欲しいのでしょうか？」

「そうだね、まずは君の家で暮らしたい」

「……プロポーズでしょうか」

「はっはっは！ そうだとしたら僕も君も困るだろう！？ ただ寝る場所があればいいのさ！」

「分かりました、自称幽霊と神様の間の方」

「……その名前は少しばかり分かりづらいね………」

名前を聞いていないので当然です。

「私は市原舞といいます」

「ふむ………僕の名前は………」

少しばかり考えた後、その人は誇らしげにこう言いました。

「………そう、神楽龍一さ！」

「と、そうして私と神楽さんは出会いました」

「そうだったんですか！。不思議な感じがしますね！」

「そうだな。俺達の最初の出会いがぶつとんでなく見える」

とある部活中。狭山さんに、『私たちはどのように知り合ったのか』と聞かれたので答えてみました。狭山さんは同情の眼差しを向けてきます。気持ちは分かりますが。

「その後で今の狭山さんのような説明を受けていったんです」

「……どのくらいまで信じた？」

「いいえ、信じていませんでした」

「なんと！？ 僕の言葉は舞君の心には届かなかったというのかね！？」

「お前、いたのか」

一応最初から私の話を横で聞いていた神楽さんが大袈裟に反応します。

「お前な、よりにもよっていきなり事故なんて不幸をもたらすな。

一歩間違ったら死んでただろ」

「はっはっは！ そうだね！ そのくらいの事故だった！」

「笑い事じゃないんだが……」

「最終的に舞さんが無事だったからよかったじゃないですか」

今、狭山さんはおそらく私と神楽さんの関係と今の自分たちの関係が同じものだと思っているでしょう。

ですが、おそらく私たちと狭山さんの間にはわずかな、そして致命的な違いがあるような気がします。

「……神楽さん」

「ん？ どうかしたかね舞君！？」

「……私たちと狭山さんたちは、一緒にいられるでしょうか」

「……はっはっは！ 何を言っているのかね！？ 当たり前さ！」

私の予感を吹き飛ばすように、神楽さんは豪快に笑いました。

「心配はないよ。君は笑っていられる。絶対にね」

「……そうですか」

「貴方たち、練習しないのならここに来る必要はないんじゃないかしら」

「い、いや、あれだ、今後の方針について話し合いを……」

「だったら尚のこと神楽くんは話に参加する必要はないわよね？」

「ま、まあ……」

松崎さんに見つかってしどろもどろの言い訳を始める狭山さんとそれを微笑ましげに見つめる小夜さん。

「……心配はいらない。きっと彼らも、笑っていられる」

「……そうですね」

いつか来るであろう予感を胸の奥に押し込め、私は大人しく練習を始めるのでした。



霊媒様はかく出会えり（後書き）

3年前のある梅雨の日。

彼女はこうして出会いました。

なんとなく回想風にしてみたのですが、どうでしょう？

最後の舞と神楽の対話は意味があるようでないかもしれませんが。実は本当に意味があるかもしれません。

つまるところ深く考えなくてもいいでしょう。

では、次回もテーマが未定ですが、何か読みたい話などあればどうかひとつ教えてください。

全力で実現したいと思います。

ではでは、さよーならー！

## 死神様はかく出会えり（前書き）

リクエストのあった、黄泉と神楽の話です。

が、正直言つてオススメしません。

血が駄目な人は読まずに引き返した方がいいです。

## 死神様はかく出会えり

俺の人生で、最初に記憶しているものは、薄暗い家の一室を紅く染める鮮血だった。

「……………」

特に驚きはしなかった。

むしろ、とても自然なことのように感じられた。

俺は目の前に転がった肉塊を眺め、やがてあることに気付いた。

汚い。

見れば見るほど不潔で、不快な存在だった。

俺は自分の手に握られた刃物とその肉塊を交互に見て、やるべきことを発見した。

ドンドンドン！！

「開けなさい！！ 開けなさい！！」

「通報通りだ。凄い異臭だな……………」

「やむを得ん。強攻突入を決行する」

ドンッ！！……………ツドンッ！！ バタンツッ！！

誰かが、介入してきた。

「……………これは……………」

「……………う……………っ！？ おえ……………っ！！」

介入者たちは、何やら俺と肉塊を見較べては騒いでいた。  
煩い。

俺が次に見たのは、監獄だった。

「なんて子供だ……………！！」

「本棚にあった医学書の通りに、自分の母親をバラバラにしていた

らしい……」

どうも、俺の行動は他人にとって理解出来ないものようだ。

「おい、あの母親、どうも外国人売春婦だったらしい」

「うげ、てことはこいつの父親なんか分からないってことか」

「母親譲りだな、あの髪は。真っ黒だ」

「不吉な色だよ……」

「噂によると、相手は貴族らしいぞ」

「じゃあお坊っちゃんじゃないか。信じられないな」

やらなければならないことはなかった。

やりたいこともなかった。

だから、毎日ただひたすら外の人間の話を聞いていた。

母親はやはり不潔な存在だったようだ。俺が感じた不快感は間違っていないかったらしい。

父親は高貴な人間らしい。顔も知らないが、一度会ってみたいものだ。

そうして、俺は暫くの時間を過ごした。

「おい、聞いたか。お前の人生も明日で終わりだ」

「馬鹿、滅多なことを言うな。こんなことが知れたら国中の恥だ」

どうやら俺は明日死ぬらしい。

どうでもよかったが、今になってあの家で読んだ医学書が気になった。

その日の夜、俺は初めて牢屋の中を動き回った。

別に意味はない。

ただ、最後に記憶の大半を埋め尽しているこの空間をもっと知っておきたくなつたからだつた。

チャリ。

そして、その行動は俺の運命を変えた。

「……ナイフ……？」

俺が持っていた物ではなかった。

もっと細く、鋭い。

「……」

それを眺めていると、不意にあの日の光景が蘇ってきた。  
血の、匂い。

「……」

そつと格子に手をかける。

パキン……ッ！

偶然か、必然か、運命か。格子の鍵は少し力を加えただけで外れた。老朽化が原因のようだった。

「……なっ！？ お前 カハッ！？」

「馬鹿な……！？ や、やめろお！？」

……そして、俺は自由になった。

一振りのナイフだけを手に。

「あらボク、こんな夜中にどうしたの？ よかったらお姉さんと遊ばない？」

自由になったと思った矢先、不潔な存在が近寄ってきた。  
どうやらコレは1人ではないらしい。

「……んで……う」

「……え？ なんて？」

遊んでもらおう。

「ヒッ……！！」

首を切った後は大人しくなった。  
だが相変わらず不快な存在だ。  
どうすれば不快でなくなるだろう。  
俺は医学書に書かれていた通りにその肉塊を切っていった。

俺がその生活を初めてどれだけ経っただろう。

俺は路地裏の一角に追い詰められていた。いや、追い詰められていたという表現は正しくないかもしれない。逃げている意識などなかったのだから。

「おい、本当にこんな子供の仕業なのか？」

「ただだつて見るよ、そのナイフ」

「信じられんな……」

どうもこの人間たちにとっては俺がしていることは許されないものだった。

「なら、俺を殺せばいい」

「……そういうわけにもいかない。最終的に処刑されるにしろ、前は殺人犯として法廷で裁きを受けなければならぬんだ」

俺はそろそろ嫌気が指していた。

どうもあの不潔な存在たちは俺一人の手に負える数ではないらしい。

永久にこんなことを続けるより、もっと効率の良い方法をその時閃いた。

だから、首にナイフをあてることに迷いはなかった。

「……え……！？」

おかしい連中だ。

誰もが動き方を忘れてしまったかのように呆然と立ち尽くしている。

まあいい。これで俺もようやく解放されるのだ。

それでは困るのだよ。

声が、聞こえた。

そして、気が付くと、俺の体は地になかった。

「……何だこれは」

「不思議な体験だろう？」

目の前には、見たことのない顔立ちの男が浮いていた。俺も人のことは言えないが。

「さて、君は数多くの命を奪った。そう、数え切れないほどね」  
説教でもするつもりか。

「では問題だよ。人の命とは何かな？」

考えたこともない。所詮有機物の集合体だろう。

「君は砂糖を溶かしたエタノールを命と言うのかね？ 命が命であるというのは何と不思議なことか！」

何が言いたいのか分からない。

「さて、そんな君には人というものを知ってもらわねば困る」

「人ならもう知っている。中に何が入っているのかも」

「そんなものは人ではない！」

一瞬、空気が震えた。

「世界の創造主として君に命じる。罪を償い、彼女を救え」

世界の創造主とは何のことか、彼女とは一体誰なのか、見当もつかなかったが、その言葉が出鱈目だと断じる気にはならなかった。

ただただ、目の前の男の存在感を肌で受け止めるのに精一杯だった。  
「まずは名前を訊こうか。君はなんという名前かね？」

「……俺に、名前はない」

「そうだね。君に付けられたのは単なる記号だ。それは名前ではない」

記号。

そう、俺は記号でしか呼ばれない存在だった。

「だが残念ながら僕に君の名前を付けることはできない。君の名前はいつか誰かが付けてくれるだろう。それまでの間は記号で呼ぶことを許して欲しい」

「どちらでも構わない」

「そうかね。……しかし……」

その男は、真剣な顔で俺を見た。

「……しかし、君はまず裁きと罰を受けなければならない。話はそれからだ」

法廷、などというものよりも、この男の裁きという言葉の方が遙かに説得力があった。

「構わない。俺が知りたいのはこれから何をすれば良いかだけだ」

「……そうか。では行こうか。ジャック」

俺の人生で最後に見たのは、薄暗いロンドンの路地裏を紅く染める鮮血だった。



## 死神様はかく出会えり（後書き）

敢えて何も言いません。が、彼はそういう存在だった、ということです。

付け加えますと、19世紀後半に彼は人間としての生涯を終え、やがて死神となります。

その話は続けて書くかもしれません。

では、読んでいただきありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1230d/>

---

厄神様はかく過ごせり

2010年10月8日13時12分発行